プラトンの国民教育論

今　井　直　重

Plato's Doctrine of National Education

第一節　国民教育の構想（その一）

(1)　教育の意義

教育（παιδ ία）はすべて少年時代から人間を有徳にする訓練である。市民に適わしい人間、すなわち正しく支配し正しく服従する市民を育成することである。[1] これと対照に、富や権力を獲得したり、勝利（τροφή）を得るためのものではない。知識や正義を伴わないような富・権力・勝利を目的とする指導は卑しいものである。[2] それ故に教育は市民にとって最も大切なるものである。よく教育された立法者は善法（εὐνομία）を齎らし、市民の人格のうちに、法の理念である正義をうえこむことができるのである。[3]

ギリシアの詩人や思想家達は、教育を幸福な人にとっては飾りもの、不幸な人にとっては慰めのためのものと考えた。[4] それは商業や技術の準備というよりも、精神や人格の教養と考えられたのである。かかる考え方は貴族政治（aristocratia）時代の考えのうちにあった。教育が人間の価値をあらわす基準として一般ギリシア人によって認められていた。[5] ソフィストは富裕な家庭の子弟に教育を授けた。教育を身につけることは善良なる市民となるための要件であったからである。

しかしギリシア精神の主流をうけついだプラトンは、教育の目的は子供の精神・人格を発展せしめ、天賦のよき人間の性能を発露せしめることであると確信した。大抵のギリシアの都市においては教育指導は一般世論や非公式の方法によって行われていた。それ故、国家の公式機関によって行われることはなかった。しかし、スパルタにおいては、子供を幼年時代に国家の手にひきとり、強制的に国家の要求する型の人間の教育・訓練を行った。更に共同食事をすることによって、各人が終生、自分はスパルタ人であるということを自覚せしめ

た。このことはクレタ島においても同様であった。[6] アテネにおいてはかかる方法はとられなかった。これについてペリクレスは次のごとくのべている。スパルタにては、市民は年少の時代から苦しい訓練をうけているが、アテネにおいてはかかる強制はないが、しかし、一朝事あるときの訓練は怠ってはいない。[7] その後アテネがスパルタとの戦いに敗れてからは、かかるペリクレスの自由主義はすたれていった。しかし、プラトンさえもスパルタの厳格な教育制度を彼が構想していた理想国家にとり入れる価値があると考えたのである。プラトンは流石に大哲であるから無批判には受け入れるわけはない。教育はすべての人々にその人の保有する徳を発展せしめるという目的をもっている。ただ武人としての徳だけを育成するものではないと考えた。[8] 市民の徳が戦争目的というような極限されたものであってはならない。平和な生活から離れて戦争で死ぬということは、粗野で乱暴で底抜けの馬鹿者と思われる。かかる蕃勇は日常生活において、平和を求めて紛争をおこさないようにこらえている勇気に比べて、遙かに劣るものである。 また騒乱（στάσις）も戦争（πόλεμος）と同様に国家の静謐を侵すものであるから、教育には真の勇気のみならず温和・知恵・正義の徳が必要である。[9] このように考えていたプラトンが、何故にスパルタの教育に関心をもったのかといえば、戦争の勝利は決して国家の優越を示すものでもなく、敗北は劣等を意味するものでもない。[10] しかし、国家を強固な安全なものにして国民を幸福にすることを望んだからである。国家の安全静謐は国民に自由・知恵・善意の徳をもたらすのである。プラトンはスパルタ人がうけた教育よりももっと深い人格の訓練を意図していたのである。

徳は教えられるか。これはプラトンの最も関心のある問題であった。彼は徳は教えられるが、 それは説諭・説明・証明によってではなく、 徳の訓練と類推によってである。いかなる学術技芸も長い訓練なしには得られるものではない。習い性となるようにならなければ身につくものではない。この教育方針がスパルタの訓練のうちに窺われる。訓練・心情こそ行動の主動力である。人の習性は先づ快苦の心情によって固められるのでなければ、人格に定着するものではない。[11]

教育が適当に施されると市民の徳と人間としての魂の徳との一致をもたら

す。人間の行為にはつねに快苦の情が伴うのであるが、よく教育されると、心情は更に深められ高められて愛すべきものを愛し憎むべきものを憎むようになる。愛すべきものとは道徳であり、憎むべきものとは不道徳である。不道徳は当然法の禁止するところのものである。精神は超感覚的なイデアと感覚との媒介者であり、またすべての行為の源である。精神の働らきは自発的であって、外部的強制によるものではない。しかも自発的な働らきにはロゴスが伴うものである。[12] かくして教育の目的は子供の精神をして内面的にはロゴスの命ずるところを、外面的には国法の命ずるところを行うことを快とし、またロゴスの命令に反すること、国法の禁止することを行うことを苦とするような快苦の情（*ὀλκή τε καὶ ἀγωγή*）を誘発することである。[13]

(2) 教育法（その一）

古代ギリシアにおいては教育は個人的なことがらとして、各家庭において夫々その子女を教育していた。父兄がその子弟を教育し、また家庭教師を雇って教育せしめていた。しかし古典時代においてはすでに学校（*διδασκαλεῖα*）ができて読み書きを教えていた。教養のある外国の居留民や有識の市民が先生（*διδάσκαλοι*）として月謝をとって家塾を開いていた。一般の文法学校のほかに体育学校や老若男女を問わずに入学できる各種学校（*παραστράτη*）があった。若者は体育教師（*παιδοτρίβαι*）のところで学習し、年長者は仲間と談論することによって研修した。体育学校はすべての市民に開放されていたが、学校の経費が富裕な人の寄附金でまかなっていたので公的な性格をおびていた。しかし先生は公務員ではなかった。[14] 文法学校も体育学校も授業料をとって授業をしていた。やがてアテネに公立学校が開始されるようになった。紀元前4世紀にはアテネにおいても、国家が学校の管理に当るようになってきた。文法学校にも体育学校にも、生徒の入学年令、収容人員、授業時間、学科目、修業年限、カリキュラム等に関する学校教育法が制定されるに至った。公立学校の学科目は文字（*γράμματα*）音楽（*μουσίκή*）体育（*γυμναστική*）であって、当時アテネで行われていた私立学校と同様であった。[15]

音楽はホメロスの時代からギリシア人に大きな影響を与え、人格の形成に深い浸透力をもっていた。体育もまた雄々しい性格と肉体の美を発展せしめるものとして望まれていた。それ故にこれらのことがらにすぐれることをもって最大の栄誉と考えられるようになった。体育は特に Olympia, Nemea, Delphi 等において開催された全ギリシア大会において各国の選手がその妙技を競ったのである。そしてこれらの競技の勝者には桂の冠がかむせられ、ホメロスのオデッセイやイリアスの英雄に擬せられ、家門の栄誉として永く子孫にも伝えられた。それ故に富裕な家の子弟が主として学んでいた体育学校も、その民主化の傾向とともに紀元前5世紀末にはすべてのアテネ人がその子弟を体育学校に入れて体育の訓練に専念せしめるようになった。(16)

文字の研究は三つの学科目のうちで最もおくれていた。その程度も普通日常生活の必要を充たす読み書きが主となっていた。しかし、文法学校は紀元前5世紀に入ってからギリシアの各地に開設されるに至った。この時代はアテネがマラトンの陸戦においてまたサラミスの海戦において、ペルシアの大軍を撃滅して大勝を博し、アテネの繁栄は極に達し、その黄金時代を迎えた。この繁栄は頓に学校教育振興の要求を高めた。紀元前5世紀の中頃には高等文法学校が開設されるようになり、その後他のギリシアの各地にもかかる教育機関が設立されるようになった。(17)

文学の研究は以前は音楽の一分科であったが、詩のテキストの研究と作詩法が一分科として文法学校で行われるようになった。更に散文作家の作品もテキストとして使用されるに至り、プラトンの時代には文法学校はギリシア各都市に設けられるようになった。(18)更に公共の基金や富裕者の寄附金によって多くの公民学校が設立された。これらの学校にてはよき市民（*οἱ καλοὶ κἀγαθοι*）として必要欠くべからざる資質を養成することを目的として教育が行われた。特に若者の教育は将来国家活動の担当者となるべき人の養成であるから、国政のうちでも最も大切な事がらである。(19)教育への関心は、若者をして過去の偉大なる政治家・立法者であったソロン、カンダロス、ライカーガス等を理想像として育成する方向を目指していた。(20)教育は市民にとって、否むしろ人間にとって最も大切なことがらであるから、自由意思にまかせておくべきことではなく、

教育法を制定して義務として行わるべきであると考えられるようになった。既にソロン、カンダロス、ライカーガスも或程度の教育法の制定に着手したのであった。プラトンもクリトンにおいて教育法を制定して、市民に対して子弟に教育を施すように指導すべきことを説いている。教育法は父兄に対し子供を教育するように勧告する（παραγγέλλουσι）ものであるとのべている。[21] 子供に教育を受けさせること（γράμματα）を拒否する父兄に対しては罰金を課するようにした。ソクラテスが告発されて死刑の宣告を受けた理由の一つに、若者に教育を施すことについてソクラテスが反抗した廉によるものといわれている。しかし教育ということは、人間個人としても国家の政策としても大切なことであるのみならず、更にそれを施すための施設と教授法について研究がなされねばならないのである。プラトンは教育革新について二つのことを提言している。その一つは教育は義務制でいかなる父兄も彼等の子女を学校におくることを拒否する権利はないのである。このことは社会の利益のためである。[22] また子女は親の子というよりも国家の子であるということを考えなければならない。というのは未来の国家を背負って立つ人々だらかである。国家の安泰、国民の幸福は一にかかって彼等の双肩に担荷されているからである。またプラトンの国家存在の意義は市民を有徳にし幸福にすること以外にはないのである。しかしこの目的を達成するためには国家の制度を維持するに足る市民の資質の錬成が必要である。そのためには市民学を習得せしめなければならない。[23] かかる公民教育は国家によって管理されねばならない。それ故に、教育の方法・教師の選考は国家によって決定され、教育方針・教育組織も国家の定める準則に拠らねばならないのである、[24] しかし国家にはそれぞれその国家の特殊事情や独特な体質があるので、その点を考慮して教育を行うべきことをのべている。これについては、アリストテレスも、市民はその国家の特質に適合するように教育されねばならない。ここに国家の特質というのは、国家の生誕・民族性・歴史・伝統等を指すもので、いわゆる国体ともいうべきものである。[25]

しかし、市民にとっては徳の訓練が第一である。このことはすべての国家にとって共通である。それ故に教育の管理は国家公共団体の機能であらねばならない。また市民の資質の錬成は終生のことがらであるから、単に子女の教育を

要請するのみでなく、父兄自身も学校の施設を利用して人格の陶冶を怠らぬように警告している。教育には貧富の別なく、国家・社会のために有用の材を活用せんとすれば人材の養成が何よりも大切である。人間の才能の啓発は人の資質によるものであるから、教育においては貧富の別なく、また老若男女を問わず、その才能の資源を各種各様に発揚して、国家の発展市民の幸福のために有効に用いることが望ましいのである。[26] ここにプラトンの教育の均等主義の精神、人間の能力の開発、人類の幸福、社会の発展、文化の創造等の理念が看取される。

プラトンの教育理念のうちには多くのスパルタ的なものが混淆しているように思われるが、それはスパルタ人が考えていたよりも、もっと高い広い深い視野に立つものである。スパルタは高度国防国家で軍国主義に徹していて、戦争において勝利を得ることをもって唯一の目的とする体制をとっていたので、教育もこの意図に適合するように軍事訓練を主眼として行われたのである。スパルタの強制教育（ἀγωγή）はすべてのスパルタ人に強行された。スパルタの血を享けていない者でも、スパルタの教育をうけた者は、スパルタ市民のすべての特権が賦与された。しかしプラトンの教育はもっと視野の広い立場において、高い目的のためにすべてのアテネ市民に課せられるべきものであった。教育は市民として、また人間として、最も本質的なもの、イデアの諦観を目指して行われ、他のことは附帯的なものであった。[27] アテネにおいては奴隷は文法学校や体育学校に入学を許されなかった。永住権を与えられた外人は特に国会の承認を得て学校に入学することを許された。[28] またスパルタにおいては、貧しくて共同食卓の費用を支払えない者は市民権を剝奪され、そのために子女を学校へ入学さすことを拒否された。それ故に子女の教育は彼等の父兄の共同食卓（φιδίτια）と関連をもっていた。またペルシアの領土になっていたシラス（Cyrus）においてはスパルタの教育を模倣していた。公民学校はすべてのペルシア人に開放されていたが、勤労（ἀργοῦντας）のみによって子供を育てている貧しいペルシア人はその子弟を学校に入れることを許されなかった。プラトンは教育は人間として、市民として最も大切なことであるから、市民の子弟が自由に普通学校や専門学校において学べるようにすることを要望した。[29]

かくのごとく教育は人間にとって最も大切なことがらであるので、プラトンは教育担当の最高の指導者であり責任者である教育大臣は最も偉大なる人物であることを要望した。[30] 教育大臣はすべての政府高官のうち最も重要なる地位におかれていた。 この地位はすべての 公務員によって 守護官のうちから選ばれた。 この選挙はアポロの神殿において行われた。 選挙者は守護官のうち、人格・識見・学知において最もすぐれていると思われる者を選んだ。しかし教育大臣の被選挙資格には厳しい制限があった。すなわち、既婚の者で、男子と女子の両方の父であって、年令は50才以上で現に守護官であることとなっていた。教育大臣はまた単に教育官という名称でよばれていた。教育官に選ばれた守護官は任期は五年であって、再選はされないことになっていた。[31] またスパルタやクリートにおいてあったパイドノモス（παιδονόμος）も教育官として最も重要なる地位であった。それ故市民のうち最上級の人々のうちから選ばれた。しかし、その職務は主として子女の監護（ἀγλέλαι）とその躾の監督が重要なる役目であった。[32] クリート島にては、パイドノモスは共同食卓（ἀνδρεῖον）の座長であって、複数で教育や徳育に携った。プラトンの教育官は一人であって、すべての教育の分野を監督した。老若男女のすべてに亘って、教育に関する事柄、音楽・体育・競技・競演・祝祭等についての指導権をもっていた。[36] 更に教育官はすべての教育公務員を任免し監督する。また教育公務員に指令を発し、教材の選択権や検閲権を行使する。[37] 教育官は夜間会議の議員となり、その資格は在任中のみならず終身であった。[38] また外国の国賓に対して、国の主席迎賓官であった。[39] 教育公務員は二種に分たれ、 体育と学校の監督官（ἐπιμεληταί）と体育と音楽の競技競演の監督官（ἀθλοθέται）となっていた。[40] 監督官は両者とも教育建造物の管理、子女の監護・指導に当った。教育公務員は市民全体のうちから選ばれた。 必要な場合には女子も選ばれることになっていた。[41] そしてこれらの監督官の下に教員がおかれていた。教員は種々の学科の直接の指導者であって、文字・文学・リラの先生（γραμματισταὶ καὶ κιθαριστάι）、男女のダンスの先生 （ὀρχησταί καί ὀρχησρίδες） コーラスの先生 （χοροδιδάσκαλοι） その他種々の体育の先生がいた。[42] これらの先生は特別な技術の習得者であるから、市民のみに限らず、広く外国の居留民をも採用され、報酬は国家から支給さ

れていた。[43]当時アテネには三箇所に公民学校（διδασκαλεῖα κοινά）があり、それらは体育学校と遊戯場（εὐρυχώρια）であった。[44] 男女の教師がこれを担当していた。男子の教員は教育を担当し、女子の教員は幼児の遊戯・保育・躾に従事した。[45]子供達は幼年期はすべてこれらのうちで過ごし、遊戯と学業を教えられた。[46]先生は職場において居住し、子供達は両親の許で生活し、彼等の家庭教師（παιδαγωγόι）につれられて学校に通った。[47]

(3) 教育法（その二）

子供の訓練は就学期以前に始めねばならないと考えられた。就学期前の教育は子供の成長の特に速い時代であるから最も大切だからである。[48]最初のかけ出しの教育が、その人の最後までつき纏い、その人の発展に最も大きい影響を与えるからである。それがためにアテネにおいては妊婦が散歩をすることを奨励された。それによって胎児が必要な受動的運動を与えられ、栄養を適当に摂取することができるからである。[49]母親や乳母は絶えず幼児をつれて歩くのがよいとのべている。幼児を歩かせることによって、足の不具になるのを防ぐことができるからである。かかる身体の訓練は精神の訓練にもよい影響を与えるからである。内心の恐怖心を克服し、憶病や小心翼々たる気分の発生を防遏するのである。[50]

母親が嬰児を揺り乍ら小声で歌う唄はその子にとってはその心魂を恍惚たらしめるものである。母親の動作にあらわれたダンスと唄は赤ん坊の内心にいい知れぬ快い醍醐味を味わしているのである。[51]嬰児期において養われた徳は終生人格のうちに浸透してその緯経となるものである。嬰児が泣き声によって表明する要求はできる限り満さねばならない。3才までの幼時期は人生において最も大切な時期である。若しこの時代に不満の斑点を残すならば、それは終生つきまとうことになる。[52]しかしこれらのことがらは立法措置によるよりも不文法（ἄγραφα νόμιμα）か民族慣習（πάτριοι νόμοι）よるべきである。[53]かかることはしきたりとして各家庭において実践することは最ものぞましいことである。[54]

子供が3才に達すると公的な監護の下におかれる。各村の子供はそれぞれの

村の神社（τὰ κατὰ κώμας ἱερά）に集まり、そこにおいて彼等の思い通りの遊戯をする。[55]その間は監護婦が子供に附き添ってよく世話をするのである。[56]子供と監護婦の監督として国家の監督官がおかれていた。この監督官は結婚監督官によって任命される婦人公務員で、12人であった。聖域における遊戯・作法を監督し、聖地を汚すような者があれば、これを譴責する任務を担当していた。しかし、この譴責は子供が聖域を汚濁するのを防ぐために必要な程度の処分であった。

学習の勉強は6才にはじまり、このときから子供は学校や体育場に通い課業（μαθήματα）を学んだ。ここにおいて男女は引離されて別個に教育された。しかし、その課目は殆んど同じであった。国家（πολιτεία）においても法律（νομοί）においてもプラトンは男女の教育科目を同じにすべきことをのべている。それ故に女子に対しても乗馬・弓術・槍投・砲丸投・円盤投・剣道等を修得するように説いている。[57]勿論戦争そのものの善悪は別として、女子としても、その性能のある者には、その希望によって、いかなる教科にも教育を開放することは望ましいことである。右手と同様に左手も訓練すればより一層よいように、男子と同様に女子も訓練すればよいということはプラトンの画期的な提言である。[58]ポンタス（Pontus）においては婦人が弓術や馬術を学び男子に劣らず熟達していることによってもその効果が立証されるのである。[59]国家を構成するのは、その男女であるから、国家の仕事の担当において女子を閑却することは、その半分を無為にすることになる。[60]プラトンはスパルタが衰頽していったのは女子の訓練を怠り、女子に教育の機会を与えなかったからであるとする。アテネにおいて、女子を家政や家財の管理に従事せしめておくことは、女子を奴隷と同じ地位におくことになるとのべている。[61]

リコルゴスの立法は女子の訓練について苦心を重ねた末、女子も男子と同様に馬術・馳足・槍投・円盤投・レスリング・跳躍等を行うことにしたのは、女子の心身を強健にすることは強健な子孫を齎らす源となるからである。国を守護するのは国民であり、国民の半数が女子であるから、一朝事あるときに男子に代って女子が国を守ることができれば国防はまことに安泰になることとなる。プラトンは女子も家庭よりももっと広い大きな分野において最大限度男子

と協力して国家活動に関与し、またその権威も栄誉も平等に開かれねばならないとする。[62] 勿論男子は威風堂々たること（τὸ μεγαλοπρεπές）、勇敢であること（τὸ πρὸς τὴν ἀνδρείαν）、女子は規律正しいこと（τὸ κόσμιον）節制的であること（τὸ σῶφρον）が長所である。[63]

学校教育はギリシアの伝統によって音楽と体育に分けられる。音楽部門においては、リラの学習のみならず、文字・文学にも亘り、更に数学に及んだ。これらは一般教科目への予備科目だからである。これらの科目の順序についても注意が払われた。

プラトンは10才から13才までは文学の学習に当て、後の3年はリラの研修と定めている。しかし体育は完全に6カ年と定めることは好ましくない。また10才以前は全く体育のみに捧げるということも好ましくない。コーラスやダンスは体育と同じく続いて行うべき教科目である。数学の学習は早くはじめるのがよいのである。[64] 読み書きは、特に文学に力を入れて10才から13才までの3年間が適切である。そこで順序からいえば、先づ音楽に専念する。[65] 次に音楽に関する法則を学ぶ。[66] その後体育に戻る。体育においては過度のことは好ましいことではない。これは知育を疎かにするからである。[67] 知識の伴わない単なる蓄力は蔑視さるべきである。プラトンの時代においてはオリムピックの勝利者はもう栄光に輝いた人ではなくなっていた。オリムピックの勝利者が民族の英雄に祭り上げられたのはホメロスやピンダロスの時代を頂点として徐々に下降しつつあった。[68] しかし一方においては体育の専門家がすぐれた術技を身につけて、精神的教養、人格・知力を犠牲にしても、特技にすぐれることをもって職業とする体操競技の専門家が現われてきた。これがスポーツの過度の発展と職業化の悪い面である。このことについてはアリストテレスも競技者の訓練が市民生活にとって不適当で、健康に有害であり、子供の教育に障害をもたらすことを指摘している。[69] ユーリピデスも亦競技族のギリシア社会に与えた数えきれない害悪についてのべている。これらの優勝者に与えられる王冠は大政治家や大雄弁家が市民に与えた有害なるもの以上のものがある。[70] かかる考え方は既に一世紀前のクセノファネースにもあった。紀元前5世紀のソフィストの弁論時代に入ると競技の権威は地に落ちて旧き時代の遺物と化していった。しかし、これに

対して、旧式の貴族主義者達は、競技者達がはまり込んだ数々の不行跡は体育のためではなくして、民主主義の悪影響であるとして競技者よりも民主主義者を攻撃した。

しかし、プラトンの職業競技者の非難はもっと深い見地からであって、体操競技は国家を防衛する市民の義務を充分に遂行し得るための目的を有するものであって、この目的を逸脱した競技のための体育は意義のないものであるとのべている。[71] たとえ戦争が勃発しない平和なときにおいても、競技を鍛練して戦争の準備を怠ってはならない（τὸν πόλεμον γυμναστέον）[72] とする。力士は闘技場へ入る前に、勝つためにはいつもそれだけの訓練を予めしておかなければならない。そのように老若男女を問わず一朝事あるときに備えて、平和な時に、戦闘に必要なるすべての身体の訓練をしておかねばならない。[73] これらの市民の訓練は競技者の熟練とは異った一種の身体的習熟である。それで学校において子供は弓や投石機の用法を学び、乗馬・槍投げ・騎兵術・軽武装の散兵戦術・重武装戦術等を学ばねばならない。[74] 一般に努力をしないような訓練は有効でない。気力・勇気・活力を養うような訓練は有効である。[75] 体育の訓練は6才から始まり若い時代を通じて一つのものにすぐれるように習熟するのはよいことである。馬術や武器の操法は早くから始めるのがよいのである。というのは、すべての宗教的儀式には、6才以上の者が馬や武器をもって参加するからである。またお祭行事における競技には年令に応じてその難易が区分されている。競走は幼年にはじまり成年に及んでいる。女子は16才から18才までの結婚年令に達するとかかる競技に参加するのを差し控える。[76] しかし、出産期をすぎた婦人は軍務に服する資格が生ずる。[77] 全市民は毎月行われる機動演習には、成年男女は勿論子供も参加し、軍務に服することになっていた。[78]

舞踊は一種の体育と見做された。[79] しかし、プラトンはこれを二種に分ち、一はミューズの神の教えに従って行うものであって、どこまでも尊厳崇高なものを表現するものである。これは公の儀式の場合に行われるコーラスのあるダンスである。子供も成人の市民と一緒にこの儀式に参加することになっていた。[80] それ故に子供の課業の一部として教えられた。他は身体の均整（εὐεξία）軽妙さ（ἐλαφρότης）美しさ（κάλλος）を表現するものとして教えられた。こ

れにおいては四肢がよく柔軟に働らき、延び延びと流動し、律動の妙味を発揮するようになされ、ダンスのすべての動作はリズムの優雅を表現するものとせられた。これは高度な丹誠のこもった堂々とした心技一体の妙を表わすものであった。アテネの子供は体育の先生（παιδοτρίβης）から、体育学校（παλαίστρα）において、ダンスの立ち振舞い（φοραί）や格好（σχήματα）を学んだのである。[81] ダンスの要諦は外面的には、立ち振舞いの美（χειρονομία）である。[82] χειρονομία の特別の形式として戦争ダンス（τυρρίχη）という戦闘の情景を模写した生気発溂としたダンスがあった。古代ギリシアにおいてはスパルタとクレタにおいて行われたといわれている。[83] すべて表現には精神がともない、心的な美が表われていることを見逃してはならない。それ故に訓練の目的は単に肉体的のものではなく、審美的な雅味と道徳的な崇高さの涵養であることを見遁してはならない。

(4) 教育法（その三）

教育は国家・国民の消長に関するものであるから、アテネにおいては、教育官の選定には特別の注意が払われたのは当然である。また国家の指導者となるべき少数のエリートの訓練に最大の深慮がはらわれた。エリートに対しては、10才から文字の学習がはじめられ3年間つづけられた。ギリシア語の γράμματα という語は広い範囲に亘っていて、初歩なるものから次第に上級のものまでを含み、また、文字から物語や散文や文学、詩文にまで及んでいた。[84] いかなる種類のテキストが彼等に課せられたかを見るに、過去約4世紀間に亘るもので、文学ではホメロスからアリストファネスに至るまでのもの、物語りではイソップからヘロドトス、ツキヂデスに亘って用いられた。[85] 修辞学の研究は中級よりも高いものであった。これらのうち最も有名なものはプロディクス（Prodicus）のヘラクライトスの抜粋（Choice of Heracles）であった。エリートの若者達は正しく教育されていて、それらのテキストを眼光紙背に徹するまでやらされたので、それらのテキストに没入して、その大部分を暗記するに至ったであろうと言われている。テキストに用いられた作者は博学多識である

のみならず道義にすぐれた師表たるべき人々であった。しかしプラトンはこれらの詩人や文学者ののべていることはよくもあり悪しくもあるから、教師は教材を取捨選択して、一切をそのまま採用しないように勧告している。少年にとって余りに広い知識は危険であるとのべている。[86] プラトンは国家篇においても法律篇においても若者の読物の内容の審査の必要性を説いている。[87] 教育官は少年の教材の選定に責任がある。教育官が教材を選定するについては何等の基準も定められていない。全く教育官の良識によって、法律・文学・詩・散文等のうちから適当と思うものを選んで教員達に使用するように指示するのである。この指示されたテキストをもって教えることに同意しない教員は教師として採用されなくなる。プラトンは特にテキストのうちに含まれている内容が国民精神の発揚に有効であるか否かについて十分に配慮されねばならないことをのべている。若し少年が成長して忠良な国民になれば、彼は確かに教育の精神を体得したことになる。[88]

文字・文学の学習の次にリラの研修が行われる。[89] 晩餐会の席で歌ったり、リラを弾奏できる能力は市民にとって欠くことのできない教養の一つと見做されていた。プラトンはアリストファネスと同様に、リラを弾奏することのできることは紳士の教養であるとともに、深い道徳的な感覚を養う上に大そう有効（χρήσιμον）であるとのべている。[90] 若者達は既に歌うこと踊ることを学んでいる。今や彼等は歌や朗唱に合わせて、またダンスの伴奏としてリラの音楽を奏でることができなければならない。この学習段階に入れば、彼等の知識は深められ高められて、リズム的・調和的となる。人格形成の上において、リラの学習は、音楽的・芸術的な魅力が加わり、学習は常に楽しいものとなるのである。しかし当時の革新家の間において行われた前衛的な音楽に対しては野卑な意味のないものとして排斥した。かくのごときものは人格を粗悪にするのみであるとのべている。リラはソロの楽器ではなく歌と踊りの伴奏として用いられ情操陶冶の上にも優雅な人格形成の上にもよい効果を与えるものと考えた。[91]

子供の歌う唄は公認された読本や祭日において用いられる歌集のように特別の審査委員会において選択されたものでなければならない。[92] かくして少年は音楽的な人格を形成し公共の式典に参加する準備教育ともなるのである。

次にプラトンは笛（αὐλός）について、この楽器はディオニソス的なものであって、若者の魂を魅了するようなよいリズムをもつことはできないといっている。[93] 未来の国家の荷い手はすぐれた感受力と技巧的熟達によって自己の可能性を発現しなければならない。未来の選良に対する高等教育は暗々裡に発露してゆくものであるから、それには楽器の選定、音楽調和の要諦、人格の形成、国家の制度への調和等についての関連を研究することが必要である。[94]

若者の教育にはまた数学を訓練することが必要である。数と数字（λογισμοὶ τε καὶ περὶ ἀριθμούς）測量（μετρητική）初等天文学（ἡ τῶν ἄστρων περίοδος πρὸς ἄλληλα）が課されねばならない。[95] これらの学科は機械学と関係があり、当時においては既に機械工は単なる職人ではなく、機械学についての科学的知識を有する技師として認められるようになった。[96] 紀元前4世紀頃には幾何学や天文学は中等学校において教えられるようになり、教育の進歩と改新を特色づけた。[97] この風潮がソフィストの教育にも採用されて、エリスのヒッピアス（Hippias of Elis）は球積曲線（quadratrix）の発見者であった。真の意味における数学者は算術・幾何学・天文学・音楽を生徒に学ばしめた。この四科目はピタゴラスによって開始されたもので、後に中世の四科目（quadrivium）となったのである。これらの科目は、プラトンにおいては16才からはじめられ、リラの3年間の修練の後において授けられたのである。[98] またプラトンは数学天文学は我々の日常生活、家政、行政、軍事等あらゆる公私の分野において応用して、実用化されねばならないことを強調している。[99] 更にエジプト人がやっていたように何んでも文字や数字で表示するように教育されねばならない。[100] 数学の効果は更に精神的に重大なるものがある。生来のろまの人間をして鋭敏で好学の人物にするもので、いわゆる神術（θεία τέχνη）によって、生来の性質を克服して揚棄するものである。[101]

数学は実践生活と異った数理の世界に導びき推理の能力を修練する。[102] 未来の国家の指導者たらんとする人には数学の研究は不可欠である。彼等は頭脳を体系的な精密さと正確さ（σύμπαντα ὡς ἀκριβείας ἔχομεν ἀδιαπονεῖν）をもって数学について訓練せねばならない。その努力の成果は後に判明するのである。[103]

次に若人は尺度・表面積・分量・音響・運動に関する問題の研究に移ってゆく。これらは平面幾何学・立体幾何学・音響学・力学、更に運動量等の問題であって、中級の分野の学問が施されるのである。そして最後に天文学の問題の研究に向うのである。太陽や月を自然神と考えている人々にとって、これを単なる自然物として、科学的研究の対象としてメスをいれることは不敬慶と思われていたが、かかることは全く非科学的な態度として排除されねばならない。[104] 天体の研究は国家にとっても、神々にとっても、まことに有益であり、尊いことである。誤ったことをそのままにしておいて、それを伝えることこそ却って不敬である。[105] しかし当時のギリシア人は天体が一定の正しい軌道を運行することを充分に認識せずに、不可思議なるもの（πλανῆται）と考えた。天文学の研究が盛んになるにつれて、天体運行の正しい軌道を、アカメデイアにおいて、プラトンの指導の下に明らかにされるようになった。[106] これについてのプラトンの功績はいくら高く評価されてもされすぎるということはないのである。プラトンがかかる偉大なる効果を収めた理由は、その門下生の才覚を精鋭化し、よくその研究を指導したからである。[107] しかし、プラトンの思考の根柢にあったものは他者の推測以上に深いものであった。これらの若い俊秀を国民の指導者として、国民に適確な指導をする能力を涵養するには、数理的に最も厳密な思考を必要とする天文学的思索が必要であったのである。かかる国家百年の大計を立てて、これが実現の素地をつくったのは、プラトンの長い待望の理想の実現であった。[108] これ以上に高級な学問についてはプラトンは述べていないのであるが、彼はそれを明示することを差控えたのである。学科名を挙示したりそれらの順序や組み合せ方、綜合の方法等についてのべることは困難であったにちがいない。しかし、それよりも困ったことは彼の指導の下にある優秀なる学生がその知識を悪用して、好ましからぬ方向に使用したからである。プラトンはこれについて次のごとくにのべている。有識の徒が彼の知識を悪用するのなら、全くの無知の方がよほどましである。全くの無知者は余りひどい悪行はしないが、育ちの悪い者で知識だけ習得されて身についていない者は、その知識を込み入った有害な方向に悪用するからである。（πολυπειρία καί πολυμαθία μετὰ κακῆς ἀγωγῆς）[109] プラトンは特にソフィストにおいてかかる

実例を発見したのである。高等教育を徳の具わっていない誰にでも与えると、その結果はその学生本人にとっても、亦哲学という高貴な学問にとっても不幸な結果をもたらすということを体験したからである。(110)

一般的にいってプラトンの教育思想のうちには当時のスパルタの伝統的な思想が多分にぬけきれずに影を潜めていることは誰にでも窺えることである。究極の目的は国家の安全と繁栄であるから、国家活動もこの目的に適合しなければ価値なきものとなるからである。勿論国民は国家の消耗品でもなければ附属物でもない。それは貴い完成されるべく創造された人格である。その使命を果すためには国家の安全と繁栄が何よりも必要である。このために国民が尽力をすることは当然の責務である。ペロポネソス戦争でスパルタに敗れたアテネが、いかにみじめで不幸であったかを身にこたえて知っていたプラトンにとっては、国家の防衛と繁栄という目的に適合するように国民の教育を行うことが必要であった。それがためには女子も男子と同様に訓練を行うべきことを説いたのである。しかしプラトンのごとき大哲が好戦的なスパルタを模範として、軍国主義を唱導し、学問や哲学を忘れるようなことがある筈がないのである。プラトンの国家論のうちにはスパルタの制度が理想化されて描き出されているが、それがそのままプラトンの国家の理想像と見ることはできない。プラトンにはそれ以上にもっと深遠高邁なるものがある。これを見失っては皮相なプラトンの見方とならざるを得ないであろう。表面にあらわれた文字を通じてその紙背に存するプラトンの心奥を理解することこそ真にプラトンの解釈と考えられる。これがために国家篇において叙述されたものは法律篇において、すべて訂正されているのである。これによってプラトンの思索と体験の発展が見られ、偉大なる人間大哲プラトンの姿が偲ばれるのである。(111)

(1) Platon, Politeia, 643c.

(2) Ibid, 664a.

(3) Ibid, *παιδεία* は *διδασκαλία* と対照されるのであるが、これについて Democritus も同様のことをのべている。Diels-Kranz Fr. 180.

(4) Morrow, Plato's Cretan City. p. 319.

(5) Platon, Protagoras, 326c.教育を受けさせることのできるすべての市民は、彼等

の子供に体育と音楽を勉強させた。

(6) Storabo. X. iv. 16.

(7) Thuc. I, 39, 1. アテネの大政治家で且つ賢者であったフォキオン Phocion（B. C. 4 世紀の人）が彼の息子をスパルタに留学させたことによってアテネから追放された。

(8) Aristoteles, Politica, 1324b 8.

(9) Platon, Politeia, 628c～630d.

(10) Ollier, Le mirage spartiate, 271～272.

(11) スパルタ人とアテネ人との間には人格上の差異が見られる。アテネ人は他の国民と比較して格別に善良であった。彼等は自発的に（*αὐτοφυῶς*）純粋に（*ἀληθῶς*）強制的ではなく（*ἄνεω ἀνάγκης*）人為的でなく（*οὐ τι πλαστῶς*）行動をした。スパルタの教育は特にアゴーゲー（*ἀγωγή*）といった。*ἀγωγή* はノモス篇において *παιδεία* のかわりに用いられている。645a 、645d、673a、819a. また国家篇 604b において。アリストテレスも倫理学 Nic. Eth. 1199b. 31. 政治学 Pol. 1292b 14, 16 において。Archytas of Tarentum もスパルタの教育について *'υπὲρ παίδων ἀγωγῆς* といっている。(Diels-Kranz, I, 439, 24.) また Polybius も同様に *τὴν λεγομένην ἀγωγὴν ἐν Δακεδαίμονι* (Ages, I) とのべている。

(12) Platon, Phaedrus, 261a. 精神の自発的行動はロゴス的導き（*ψυχαγωγία*）によるのである。

(13) Ibid, Nomoi. 659d.

(14) アテネには三つの体操学校が創立された。そのうち academy は Pisistratidae によって創立された。

(15) Platon, Politeia, 376e.

(16) Ibid, Protagoras, 326b.

(17) In Poll IX, 41 ff. *πόλεως μέλη* は *γραμματεῖα, διδασκαλεῖα, παιδαγώγια* を含んでいた。

(18) Platon, Protagoras, 338c.

(19) Aristoteles, Politica, 1337a 11.

(20) Plut, Solon, 22. カンダロスの立法にては父兄が子弟に *γράμματα* を教えた。

(21) Platon, Criton, 50d.

(22) Aelian, Hist. VII, 15.

(23) Platon, Nomoi, 804d.

(24) Ditto, 846d.

(25) Aristoteles, Politica, 1337a, 14. Platon, Politeia, 308e.

(26) Ditto, 543a. *παιδεία κοινή* は *ἄκρως οἰκοῦσα* であるべき国家にとって絶対に必要である。

(27) Ditto, Nomoi, 882a, 930d. *ἐλεύθερος* は市民を奴隷から区別するために用いられた（Nomoi, 869d, 879a）また *ἐλεύθεροι* は *οἰκέται* と *ξένοι* の両方を表わし、時には *οἰκένοι* のみを表わし *ξέλοι* は除外されている。これらは市民生活を享有している者の意味からきたものであるから、かかる混乱を生じているのである。紀元前4世紀頃には *ἐλεύθερος* を *πολίτης* と同様に解している。（Arist. Politica 1291b 27, 1290b 10, 1292b 39）Demosthenes LVII, 45, 69.

(28) Ditto, 850cd.

(29) Ditto, 804d.

(30) Ditto, *ὁ τῆς παιδεία επιμελητής* (765d, 936a, 951e, 953d)

ὁ ἐπὶ τὴν τῶν παίδων ἀρχήν (809a)

ὁ τῶν παίδων ἐπιμελητής (813c)

ὁ περὶ τὴν Μοῦσαν ἄρχων (813a)

ὁ παιδευτής (829d)

(31) Ditto, 765de.

(32) Ditto, 755a, 765d.

(33) Xen, Const. Lac. II 2. Plut. Lyc. 17.

(34) Aristoteles, 1322b 39, 1336a, 32 *παιδονόμος* はアリストテレスの時代には、まだそれほど顕著な地位としてあらわれていない。紀元前3世紀頃からその重要性が増してきたのである。パイドノモスは市民のうち最高級の人々のうちから（*ἐξ ὧνπερ ἁι μέγισται*）選ばれた。Plut. Lyc. 17. パイドノモスは市民のうち *καλοὶ κἀγαθοὶ* から選ばれた。

(35) Platon, Nomoi, 765d, 936a.

(36) *παιδονόμος* は現場の教育（*παιδεία αὐτή*）のみに従事したが、教育の全分野に亘っての管理（*παιδεία πᾶσα*, Nomoi, 765d, *παιδεία ὅλη* Nomoi, 936a）をしたのがプラトンの教育官であった。

(37) Platon, Nomoi, 813c, 811de, 936ab.

(38) Ditto, 951e.

(39) Ditto, 953d.

(40) Ditto, 764cd.

(41) Ditto, 813c.

(42) Ditto, 812b, 813b, 813e.

(43) Ditto, 804d, 813e.

(44) Ditto, 804c.

(45) Ditto, 795d.

(46) Ditto, 804d.

(47) Ditto, 808cd. *παιδαγωγοί* はプラトンの古典時代においては外人奴隷であったのである。先生の宿舎は学校内に建てられていた。それ故に *εἰς διδασκάλου*, *ἐνδιδασκάλῳ* といっている。Protagoras, 325d, 326bc. Theaetetus, 206a. ギリシアにおいては学校は早朝、即ち日出から始まったのである。

(48) Ditto, 788d.

(49) Ditto, 789b～d. プラトンは妊婦に乗馬、ボートに乗ることが胎児によい影響を与えるとのべている。

(50) Ditto, 791bc.

(51) Ditto, 790e. プラトンは精神の不安定における歌や踊りの治療的効果を説いている。(790d, 791a)

(52) Ditto, 792a～c. アリストテレスも赤ん坊の泣き声は運動であって子供の成長にとって大切な役目を果しているとのべている。(Politica, 1336a 35)

(53) Ditto, 793a.

(54) Ditto, 790b.

(55) Ditto, 793d.

(56) Ditto, 794c. 子供の保姆（*τροφός*）はギリシア人の家庭には必要欠くべからざる存在となっていた。

(57) Ditto, 794cd. 女子にも戦争の術（*μέχρι γε μαθήσεως*, 794d）の概念を学ぶことは一般に是認されることと思うとのべている。またアペルトも次のごとくのべている。"wenigstens so weit, dass sie einen Begriff von der sache bekommen."

(58) Ditto, 804d. *τὰ αὐτὰ δὴ……ἀσκεῖν deîν*. 教育のみならず他のすべてのことにおいても女子も最大限度において男子の一半を担当することは好ましいことである。(805c)

(59) Herodotus IV. 116～117.

(60) Platon, Nomoi, 814ab.

(61) Ditto, 805de.

(62) Ditto, 802a.

(63) Ditto, 802e.

(64) Ditto, 819b.

(65) Ditto, 796d.

(66) D.tto, 797a～804b.

(67) Ditto, 796d.

(68) Platon, Politiea, 404a.

(69) Aristoteles, Politica, 1335b 5, 11. 1338b 9 ff.

(70) Aristphanes, Clouds, 417. ユーリピデスとソクラテスが競技者非難の急先鋒であるとのべている。ソクラテスの学徒はすべて体育をやめた。ユーリピデスはアテネ人に競技場を空虚にして、その贅肉（ゼイニク）を除去するように呼びかけた。

(71) Platon, Politeia, 404a, b.

(72) Ibid, Nomoi, 829a, b.

(73) Ditto, 830a, b.

(74) Ditto, 813de, 794e.

(75) Ditto, 823b～824c.

(76) Ditto, 833d, 785b.

(77) Ditto, 785b.

(78) Ditto, 829b.

(79) Ditto, 795e.

(80) Ditto, 796c.

(81) Ditto, 795e.

(82) Xeno. Symp. 11, 19. カルミデスは *χειρονομία* を学んだが、ダンスを学ばなかったとある。これはもともと合唱学校にあったものが、体育学校へひきつがれたものである。

(83) Athen. 631c. *τυρρίχη* は別名 *χείρονομία* であるとのべている。

(84) Platon, Nomoi, 818a. プラトンはプロタゴラスにおいて少年時代の教育についてのべている。(Protagoras, 325c～326e) また教育の方法については Politicus, 277e～278b, Politeia, 402ab, Theaetetus, 203a～e においてのべている。

(85) 喜劇詩人 Alex. によると Orpheas, Hesiod. 悲劇作者 Choerilus, Homeros, Epicharmus, あらる散文作家の作品 (*συγγράμματα παντοδαπά*) が用いられた。

(86) Platon, Nomoi, 811b.

(87) Ditto, 811e.

(88) Ditto, 811d, 858cd.

(89) Ditto, 809e.

(90) Ditto, 812e.

(91) Ditto, 669de. Platon, Politeia, 424b～425a. Aristophanes, Cloud, 968 ff.

(92) Platon, Nomoi, 812e, 813a.

(93) Ditto, 812c.

(94) Ditto, 818d, 967e.

(95) Ditto, 817e. Platon, Politeia, 337ab. Xenophon, Mem. IV, 7. Thomas Heath, Greek Mathematics, Oxford, 1921, pp. 18～25.

(96) Platon, Politeia, 522bc. Nomoi, 747b. Philebos 55a. において、技術 (*τέχναι*) における数理的要因についてのべている。

(97) Ibid, Erast. 132ab. Isoc. XII, 26.

(98) Platon, Politeia, 536d. これらの学科は少年の時代に心に銘じておかなければならない。そうすると永く心のうちに残るからである。

(99) Ibid, Nomoi, 809cd.

(100) Xenophon, Mem. IV vii, 2～8.

(101) Platon, Nomoi, 747b, 819c. Ibid, Politeia, 523d. 数理の研究は人の知力を内省的に導びき、心の働らきを活発にし、実在の本質を把握せしめる。

(102) Piaton, Charmides, 165e.
Ibid, Politeia, 524d～525b.

(103) Platon, Nomoi, 818e.

(104) Ditto, 820e.

(105) Ditto, 821a～d.

(106) Ditto, 819d.

(107) Isoc. XV 262—239.

Burnet, Greek Philosophy, London, 1920. pp. 225—227.

Ritter, Kommentar, ss. 228—250.

Taylor, Commentary on Plato's Timaeus, Oxford, 1928 pp. 226—239.

(108) Marrow, L'histoire de la pédagogie, p. 16.

(109) Platon, Nomoi, 819a.

(110) Platon, Politeia, 539d, 535c, 536b.

(111) Ditto, 633bc. Aristoteles, Politica, 1338b 11 ff.

第二節　国民教育の構想（その二）

プラトンは国民教育について次のごとくのべている。「少年時代や青年時代における学習（μάθημα）は彼等の年令に適合（ἐπιτήδειος）したものでなければならない。彼等の成長期間であるこの時期の主要な注意は彼等の身体に注がれねばならない。やがて成長して知能が成熟しはじめるにつれて魂（ψυχή）の訓練（μελέτη）が強化されねばならない。しかし彼等の優れた者は哲学させるようにして、他のことは娯楽としてより以外にたずさわらせてはならない。[1] プラトンの国民教育においては、統治者・補佐官・武人・庶民の子弟で国家の公務員試験に合格した者は、公共的精神に徹するような教育を施されるのである。先づ彼等は私財への興味、家族への愛着、肉体的な快楽への関心は抑制されねばならない。これを実現するために、彼等にはすべて私有財産の所有が許されない。

すべて個人生活を禁じ、共同生活をなさしめ、居住を共有し、子女をも共にし、すべての品物は共有物となされた。[2] すべて国家の公務に携わる者は個人的な関心によって国家の秩序（τάξις）を乱すがごときことがあってはならないからである。国家の公務を遂行する者は身体の強健と精神の健全が必要で、勇敢（ἀνδρεῖος）で優雅（εὔνοια）に育成されなければならない。たとえば素質のよい犬は知り合いの者には優しく、知らない者にはその反対である。[3] かくし

て、優しさに対する音楽を課し、勇敢に対する練訓として体育が課せられるのである。音楽は主として魂の修練のために、体育は主として身体の練訓のために重視されるのである。特に音楽は単なる芸術の分野のみではなく、道徳や政治や哲学の領域にまで及ぶものである。哲学は最高の音楽（*μεγίστη μουσική*）であり、[4]善の領域に入り、完全なる音楽家は哲学者である。[5]プラトンは音楽は成人教育としても、人格の育成に効果があるとして、成人と雖も音楽によって道徳的人格を錬成することができるとしている。[6]ディオニソスのコーラスの会合（*σύλλογοι*）[7]において過度と無秩序を抑制して良識を保持するために、ディオニソスの神官の主催の下に規律正しく、法の支配の下に（*συμποτικοὶ νόμοι*）行われた。[8]ここにおいても遊び（*παιδία*）のうちに養われる教育（*παιδεία*）を見ることができるのである。プラトンは日常の生活のうちにおいて人格錬成の本質的要件を見出そうとしたのである。[9]

教育（*παιδεία*）は単なる知識の教授（*διδασκαλία*）と対照されるものである。[10]教育の目的は人間性を最も充分に開発された品性と人格に発展させることである。教育は畢竟すべての徳の発展という目的をもっている。教育訓練（*τροφή*）はすべて知恵と正義に適合するように行われねばならない。知恵と正義に関係のないものは卑しきものであって教育の名に価しない。[11]知恵と正義を表現する国民教育の規範が国法であるから、よく遵法されている状態（*εὐνομία*）を実現するよう国民の性格を鍛えることは、教育において最も大切なることである。[12]すべての国民の行為のうちに知恵と正義と節制（*σωφροσύνη*）が伴うように訓練されねばならない。[13]教育は国民の魂を国法に合致するように導びくこと（*ὁλκή τε καὶ ἀγωγή*）である。[14]かくて教育は魂を導びく術（*ψυχαγωγία*）[15]である。

よく教育を受けた者はよくその情操（*εὔνοια*）が陶冶されていて、ミューズ（*Μοῦσα*）やアポロ（*Απόλλων*）の霊感に触れることができるのである。[16]それは浄い魂をもって歌い舞うからである。[17]

プラトンの時代の教育は家庭、私立学校、公立学校の3種に分けることができる。家庭においては親(父)が教えるが、教僕（学識のある外人奴隷）をして教えさせた。[18]私立学校には読み書きを教える学校（*διδασκαλεῖα*）があった。

先生（διδάσκαλοι）は親から子供を教えるために授業料を受けていた。これが文法学校（grammar school）（γραμματική διδασκαλεῖον）である。これらの他に体育場（γυμνάσιον）があって、ここは市民が集合することのできる場所になっていた。ここで若者は体育の先生（παιδοτρίβαι）から教えを受けた。アテネには三つの体育場があって、そのうちの一つがアカデミー（Ακαδήμεια）になった。[19] アテネの普通教育の内容は文字（γράμματα）音楽（μουσική）体育（γυμναστική）であった。[20] 公立学校（διδασκαλεῖα κοινά）gumnasia、遊戯場（εὐρυχώρια）があった。[21] gumnasia は Academy, Lyceum, Cynosarges の三つが郊外にあった。男子の先生が教授職につき、女子の教員は小児の遊戯の指導に当った。[22]

子供の訓練は就学前に行われたのである。このことは子供の成長を促進することになるからである。[23] 妊婦に対しても歩行を奨励した。生後3年間は子供にこれを行わしめた。これによって足の不具を防ぐことができ、子供の精神にもよい影響があるからであった。これによってはじかみ、臆病、恐怖心を防ぐことができた。[24] 幼児について養わねばならない徳は健康で快活である。[25] 人生の最初の3年は大そう大切な時期であるから、この時期が不満足に過ごされると拭うことのできない汚点が人格に残されるのである。[26]

6才に達すると学校に入学することになる。男女は別々に授業を受けるが学業（μαθήματα）は主として同一であった。若し女子が拒まなければ乗馬・弓術・槍投げ・剣撃も修めることができた。[27] 学科は身体に対する体操、精神に対する音楽である。[28] 体育は舞踏と相撲に分れ、身体的訓練は軍事訓練に関するものであった。[29] 10才から13才の3年間は文学の勉強に、次の3年間は竪琴の勉強に捧げられた。この間は以前に学修した体育や音楽が全く排除されたというわけではなかった。数学の勉強も読み書きの勉強も10才から13才の文学の勉強のうちに含まれていた。[30] 体育の訓練は6才にはじまり青年の全期に亘って継続し、馬術や武術は早いうちにはじめられ、競走も早くはじめられ、成年まで継続された。女子は16才から18才の婚姻適令期に達すると競技を止めた。青年男女、子供は毎月の競技の日には参加しなければならなかった。[32] ダンス（χορός）には二種があって、祭日に踊るダンスと身体の適応性（εὐεξία）と軽さ（ἐλαφρ-

ότης）と美（κάλλος）のためのダンスである。後者は祭日のダンスの予備になるものである。[33]

文学の勉強は10才から3年間行われた。グラムマタ γράμματα という語は読み書きから文学まで一切を含む語である。[34]文学の教材に用いられたものはホメロス、アリストファネス、イソップ、ヘシオドス、ツキディデス等の詩物語から戯曲に亘り、修辞学の勉強もさせられるのである。[35]ギリシアにおいては詩人は風習や道徳の先生として、また歴史や地理の学者と考えられた。教材の取捨選択は教師の責任に委されていた。[36]更に少年教育において数学の訓練が必要である。特に数と計算（λογιγμοὶ τε καὶ περὶ ἀριθυμούς）測量術(μετρητική)初歩の天文学（ἡτῶν ἄστρων περίοδος πρὸς ἄλληλα）が学ばねばならない。[37]そのうえ家政学、都市行政、軍事学も課せられた。[38]また暦学も教えられた。[39]数学は人を賢明にして高くひき上げる神術（θεία τέχνη）とされた。[40]

音楽と体育とは、一は魂の訓練のために、他は身体の錬成のために工夫されただけではない。体育だけの行過ぎは必要以上に猛々しい人間をつくり、音楽だけの行過ぎは適度以上に人を柔弱にする。特に国家の守護者達（φύλακες）はこの両方を適度に兼備せねばならない。神はこれらの二つの術を人間に与え、それが魂と身体とにそれぞれ役立つように、魂の二つの要素、元気なものと愛知的なものとが、緊張緩和のよろしきを得て適度に調和されるように望むのである。[41]これが教育と訓練の原則である。[42]更にその他の学科の初歩や算術と幾何が授けられる。[43]これらはやがて学習すべき弁証法（διαλεκτική）の予備学科（προπαιδεία）として施される。[44]その後20才まで2年または3年間、体育特修期間であるとともに勤働や軍事に従事し、優秀な者が選抜され登録される。20才に達した登録された青年達を対象として本来の知的な教育が開始される。これまで非体系的に教えられた諸学科は系統的、組織的に行われ、彼等の本性が弁証法（διαλεκτική）に堪えるか否かを実験する試練の期間が10年間続くのである。[45]30才に達すると再び詮衡を行い、唯経験的な感覚力のみに頼らず、思索的な知性に助けられて、本質的な理念そのものを把握することのできる者を選んで統治者階級（ἄρχων）に列せられる。この選に洩れた者も統治者階級の補佐官（ἐπίκουροι）として、または防衛者（φύλακες）となり、公共の治

安や国家の防衛に当るのである。30才になって統治者階級に選ばれた者は哲学（φιλοσοφία）即ち弁証法の学習に専念して、35才になれば軍事の指揮に当りまたは行政（διοίκησις）保安等の官職に就き、15年の職歴を経て50才に至って統治者になり得る地位につくのである。[46]

一般人の教育科目としての音楽と体育についで重要な教育問題は30才からはじめられる本格的教育としての弁証法の教育である。最高の目的としての至善の境地に達し、善のイデア・善そのものを見る（思念する）境地に達することである。これは一般教養 Humanistas ではなく、国家的教育活動である。無教育で真理を知らない者も、教育に従う者も国家について配慮しないようである。国家建設者としての仕事は、最もすぐれた人々を最高最終の学としての善のイデアの諦観に向わせることである。これは国民の一階級のみを特別に幸福にすることではなく、国民がそれぞれの地位において国家に与える利益を互に分ち合い、国家の発展と国民全体の幸福に役立つようにするためである。かくて弁証法はかかる理想国家（πολιτεία）の建設のために必要である。[47]

今日の弁証法においては、ソフィストに見るがごとき浅薄皮相なやり方において多くの弊害があるので、かかる悪の発生を予防するために30才までは本格的な哲学的学習である弁証法をやらせないのである。[48]真理を求める弁証法を真似て、故意に論争を試みる論争家（ἐριστίκοι）になってはならない。弁証法によって端正なる（ὀρθός）性格を育成するだけでなく、弁証法の品位を高めるようにしなければならない。

プラトンの理想国家の建設は国民の教育を目的とするものである。最高善を体得した哲人によって統治される理想国家の実現のためには国民の教育が不可欠の条件となる。プラトンは体育・音楽・文学・数学・自然科学のような人文教養科目から次第に哲学的弁証法に至る段階的な詮衡方式が構想されたのである。学習は低次から高次へとその能力に応じて向上的に完成されてゆかねばならない。すべて教育には愛知的（ἔρως）精神が養われねばならない。また理想国家の建設と維持のためには音楽と体育によって心身を鍛練し強さと優しさが育成されねばならない。ソクラテスが教えたごとく至善としてのロゴス（λόγος）以外のものには従ってはならない。[50] ロゴスがわれわれをどこへ導こ

うとも、導くところについてゆかねばならないのである。[51] 善のイデアを理想として、イデア国家をめざして、病めるアテネ国家を治療せんとして、ロゴス国家の実現を唱道したのである。イデアへの熱愛をこめてロゴスの導きにのみ従うという合理主義の態度を堅持した。[52]

プラトンは能力主義の立場から男女平等を主張した。男女の平等は国家にとっても国民にとっても有益で（χρηστός）であり、国家の最大善（ἄριστος）の原因（αἰτία）であるとのべている。[53]

50才に達して知識（ἐπιστήμη）においても行為（πρᾶξις）においても最もすぐれた人々は魂の眼を万物に光を与えるもの、善のイデア、善そのものを諦観しなければならない。順次に国政に身を捧げ国家の支配者となり、他人を教育して、自身のようなものにならしめ、自己に代って国の統治者を養成し、後継者が継承すれば、自らは去って幸福なる者の島に住むことになるのである。[54]

理想国家を建設するに当っては、何が最善であり、何が最悪であるかを考えて、最大善を護り最大悪を除去するという目的に応じて施策が行われねばならない。国家施策のうち最も大切なるものは教育である。教育は人間の出生にまで立帰って考えられねばならない。教育の始期は嬰児からはじまるべきである。優生的見地から嬰児殺し（infanticide）の問題が生ずる。結婚においては優れた男子は優れた女子と結ばれるようにし、出産においては劣等なる生児は内密に捨てられることが認められる。男女とも盛時をすぎて懐胎した子は堕胎せしめて、優生を保護し劣生を排除して人口の制限を企図した。[55] 何事も初めが大切であり、幼児の場合は性格の形成過程であって、刻印される印象は容易に消え去ることは困難である。[56] 初等教育の主要部である音楽教育と体育教育については体育より前に音楽教育を行うようにする。幼児のために歌を聞かせ、物語りで有益なる神話を教えることによって、体育より音楽の教育を先にするようにする。[57] 詩歌音曲についてはたとえすぐれたものでも悲しみ・嘆き・酩酊・柔弱・怠惰を含んだものは避け、謹直で勇敢で善良なる市民に適合するようなものを選択して教えられた。音楽の次には体育が教えられる。体育は粗食労苦に堪えることのできる健康な身体の鍛錬を目的とするものである。理想国家においては、各人がそれぞれ国家の重要なる仕事を担当しているので、病気など

すれば治療の暇を見つけることが困難である。[58] それ故に、身体と魂の健全なるもののみが育成され、身体が虚弱で魂の素質が劣悪である者は死にまかせてもよいことにした。[59]

教育は洗剤である。国民教育に音楽と体育を行うのは、彼等の快楽・悲しみ・恐怖・欲望などのようなものはこれらの最も強力な洗剤によって洗い流すようにするためである。[60]

プラトンはファイドロスにおいて哲学は最高の音楽（*μεγίστη μουσική*）ということを宣言している。[61] 高級なる音楽は芸術の領域を越えて道徳や哲学の範囲に、更に善美の範囲にはいりゆくものである。音楽は広い意味における哲学である。完全なる音楽家は哲学者であるというのは、人間の性向を調和する方法を知っているからである。[62] アテネにおいて若者を音楽舞踏会に参加するように努力したのは、これによって道徳教育を促進することができると考えたからである。[63] またかかる会合において教育する紳士は若者と種々の対話をして、若者に有益なるものを授けることができたのである。[64]

アテネにおいては市民が彼等の義務を果すために高度の教育を必要とした。国法は国家生活において市民がその役割を果すために市民にとっていかなる教育が最も適当であるか、また市民をしてすべて善行をなさしめるように育成することを意図したものであったので、すべての法は教育法であったということができる。[65] アテネにおいては実定法によって、市民に対して市民の行為の法的基準を定めることは、市民を正しく教育するためであった。それ故に市民法はすなわち教育法であった。[66] 教育法は自然の法（*κατὰ νόμου τῆς φύσεως*）であって、永久に滅することのない自然に必要な法 *ἀνάγκη τῆς φύσεως* である。[67] プラトンが市民に対して最も要求したのは音楽や体育や医学のような問題についてよりも、国家において善良な市民となり、国家にとって徳（*πολιτικὴ ἀρετή*）を行うのにすぐれた人になることであった。[68] よい市民とは国家にとって有益なる人である。国家にとって有益な（*χρηστός*）市民は善良（*ἀγαθός*）であり、有徳（*ἀρετή*）である。[69]

すべてのアテネの市民は職業人としてのほかに第一に善良なる市民（*ἀγαθὸς ἀνήρ*）に育成されねばならない。その育成は訓練によらねばならないのであ

る。各人は正義と一般市民的訓練の役割を果す義務があるのである。[70] アテネ人はすべて一定の市民としての徳をもたねばならない。若し彼等が市民としての徳をもたなければ国家は成立しなくなるであろう。アテネには一人前の市民になり得ないような人はないと信ずる。国民のうちに暴徒や非国民が生ずるのは知識や教育の欠如からである。[71]

教育は善良なる（*οἱ καλοὶ κἀγαθοί*）市民にとって必要欠くべからざるものであった。プラトンは、教育は市民にとって、最も大切なことがらであるからすべての市民に平等に施されねばならないと考えた。また教育は国家の公事であるから公費をもって施すべきであるとして教育の機会均等主義を主張した。[72]

プラトンの義務教育制度の主張は子供は親の子というよりも国家の子であるという考え方による。[73] 特に初等教育について詳細に論じている。子供の心理・体育・生理等について比較的詳細にのべ、胎教から嬰児・幼児・小中学生の教育についてのべている。[74] 若者の心理に関係の深い音楽について深く研究し、数学についても強い関心をもって論じている。

体育は最初の教育として6才から始められ歌やダンスとともに行われる。これらは10才まで行われ、それより16才まで更に文学・音楽・数学も授けられ、一応国民としての普通教育が終了することになる。16才以上は国家公務員試験によって詮衡し、合格者に公務員教育が課せられた。高等教育の学科の他に弓術・投石術・軽歩兵・重甲兵・演習・屯田野営等をも修練した。16才にて一般国民教育は終了する。25才までは男子は地方巡遊して実地に研鑽し、公務に専念し、且つ軍事訓練が行われた。この間婚姻は許されないことになっていた。[75] アテネにおいては18才が成年であって20才までの2年間を青年国民（*ἔφηβος*）といって軍事教育を受け、市民として登録され、国の指導官（*σωφρονιστής*）の指導の下におかれ、アテネの国境において守備兵として勤務した。この間は補助巡察官（*περίπολος*）としてパトロールに当った。エフェーボスは共同会食をした。アテネには12の部族（tribe）がいたので、12地区が設けられ、各地区に5人の巡察官がおかれていたので60人のエフェーボスがおかれた。各地区に5人宛配当され、1カ月毎に地区を転じ、2年間に2回各地区を巡察した。すべて自炊をして会食した。その間に要塞・塹壕・道路を修復し、洪水を防

ぎ、灌漑を便にし、パトロールし乍ら地理・土地の利用について研究し、土木工学・軍事工学の知識を養成した。[76] 大学教育については、プラトンはポリテイアにおいて、カリキュラムの構想のみのべているが、それはアテネのエフェーボス制度のカリキュラムであって、正式の大学はプラトン自身が開設をしたアカデメイア（*'Ακαδήμεια*）が最初のものである。[77]

数学については、小数の公務員即ち補助巡察官に課せられた。これは土地管理・行政・戦争・土木・財政にとって必要欠くべからざるものであるからである。プラトンはアカデメイアの数学の先生であった。国家が数学教育について余りにも消極的であるのに憤慨した。数学は人間の研究すべき無限の宝庫であるのに国家が余りにも無関心であるのに堪えられなかった。エジプト人に比するとギリシア人は人間の名に価しない。人間の頭の中にある数学・力学を開発しないからギリシア人はこの点において豚のような鈍物である。プラトンは思索の訓練として、実用以上の高い深い数学・幾何学・天文学の知識を要求した。天体は見たところでは大変不規則に運行しているようであるが、実際はすべて一定の正しい軌道を通って運行している。天体の軌道の秩序の正しいことは、それを規律する精神的な力の存在を宣言している。即ち神の存在を証明している。神の存在の認識には天文学の研究が一番よい。それは神の存在とその働らきをよくわからせるからである。[78] 天文学は暦をつくるのに必要なばかりではなく、宗教的信条の根本原理の理解のために必要である。プラトンはコペルニクス以前のコペルニクス的転向の創設者であった。地球が太陽の周囲を一定の軌道をもって運行していることを知っていたからである。紀元前3世紀のサモスのアリスタルコス（Aristarchus of Samos）ははっきりとプラトンの地動説を信奉していた。[79]

文学は初等教育において10才から13才まで教えられていた。文学は読み書きをはじめ、古典文学を暗記する程度のものであった。その教育の方法は種々雑多であって、或る人は古典を教え、或る人は名句抄を教えた。あまり詩ばかりを教えることは有効ではない。それらの詩のうちには有害なるものが多分に含まれていることがあるからである。他に多くの有益なる人文科学者や自然科学者の散文があるからである。[80] また文学のうちに、ノモスの教材をまじえること

も有益である。かくすることによって法及び法の精神を理解するようになるからである。善良なる市民となるためには、法律及び法の精神をよく知ることが大切である。国民教育の目的は立派な市民となることであるからである。[82]

音楽については10才以前に既に学んでいるが、それは歌とダンスに関するものである。文学が10才から13才まで学んだ後、器楽と初等数学が課せられた。これらの科目は13才から16才まで3年間教育された。音楽については13才で器楽の訓練が始められる。楽器はリラであるのかそれとも種々の楽器であるのかを明瞭にしていないが、余り複雑なものでなかったことは確かである。音楽の目的は若者に道徳的心情を養い、秩序と調和を与えることであった。[83]楽譜は模写（*ὁμοιώματα*）であって、模写されるものは、作者の心魂の状態が聴く人の心のうちに反響（*παθήματα*）するのである。アテネの音楽には3段階があって、原本（*πάθημα*）、原本を着色したもの（*ὁμοιώμα*）更に聴く人の心に共感を与えるもの（*φιλάνθρωπος*）等があり、聴者をして道徳的人格の形成に役立たしめることを意図したのである。[84]

音楽は聴く人の心に最も大きな共感を与えるものである。それは人の心情に訴え、共感をひきおこし、魂を清め人格を高揚せしめる。それ故に音楽には魂を清浄にし人格の形成に役立つようなものを選ばなければならない。卑俗で低級なものは魂や人格を損傷するから避けなければならない。[85]一時的な快楽を貪るようなものであってはならない。音楽を少年期における最も重要なる科目としている理由は、人の心情に与える道徳的な価値によるものである。それ故に、プラトンは音楽の楽譜や内容の価値を審査するために50才以上の有識者の人々で構成する審査委員会を設けることを説いている。これは当時既にエジプトにおいて行われていたものを採用したのである。[86]

(1) Platon, Politeia, 498b.

(2) Ibid, 543a.

(3) Ibid, 375a.

(4) Platon, Phaedros, 261a. Timaeus, 88c.
Timaeus of Locri, *περὶ ψυχᾶς κόσμω*, XVII.

(5) Idem, Politeia, 432b, 443de, Politicus, 306e.

(6) Idem, Nomoi, 637a, 671d.

(7) Ibid, 671a, *συνουσίαι*, Nomoi, 672a.

(3) Ibid, 671c.

(9) Ibid, 671e, 656c, 798b, 803c, 804b, 832d.
Platon, Politeia, 537a.

(10) Idem, Sophistes, 229d. Philebos, 55d.

(11) Idem, Nomoi, 644a.

(12) Ibid, 659de.

(13) Ibid, 628c.

(14) Ibid, 659d.

(15) Ditto.

(16) Ditto.

(17) Ditto *ὁ καλῶς πεπαιδευμένος*

(18) Aristoteles, Politica, 1337a 5, 24～25. Nic. Eth. 1180a 24.

(19) W. Judeich, Topographie von Athen, Münich, 1931. ss. 413～415.

(20) Platon, Politeia, 376e.

(21) Idem, Nomoi, 804c.

(22) Ibid, 795d.

(23) Ibid, 788d.

(24) Ibid, 791bc.

(25) Ibid, 290e.

(26) Ibid, 792ab.

(27) Ibid, 794c.

(28) Ibid, 795d. Platon, Politeia, 410c.

(29) Idem, Nomoi, 813d.

(30) Ibid, 819ab.

(31) Ibid, 796c.

(32) Ibid, 829b.

(33) Ibid, 796c.

(34) Ibid, 810b. Platon, Protagoras, 325c, Politicus, 278ab, Politeia, 402ab.
Theatetus, 203a.

(35) Athen, 164bc.

(36) Platon, Nomoi, 811cd.

(37) Ibid, 817e.

Thomas Heath, A Greek Mathematics, Oxferd, 1921 pp. 18～25.

当時求積曲線の発見者であるヒッピアスは生徒に算術・幾何学・天文学・音楽を教えていた。これらの科目は文学とリラの勉強を終えた16才より始められた。(Politeia, 536d. Protagoras, 318d)

(38) Platon, Nomoi, 809c.

(39) Ibid, 809d.

(40) Ibid, 747b, 819c. Platon, Politeia, 523d, 524e, 526b.

(41) Ibid, 410b～411c.

(42) Ibid, 412b.

(43) Ibid, 537c.

(44) Idem.

(45) Idem.

(46) Ibid, 537d.

(47) Popper, The open society and its enemy, vol. I, pp. 88, 152.

(48) Platon, Politeia, 537e.

(49) Ibid, 538c～539a.

(50) Idem, Criton, 466b.

(51) Idem, Nomoi, 667a.

(52) R. Crossman, Plato today, p. 118.

(53) Idem, Politeia, 458b, 464b.

(54) Ibid, 540ab.

(55) Ibid, 459d, 461c.

(56) Ibid, 377a.

(57) Ditto.

(58) Ibid, 406c～d.

(59) Ibid, 410a.

(60) Ibid, 430a.

(61) Platon, Phaedrus, 61a, Timaeus, 88c.

(62) Idem, Politeia, 306de, 432a, 443d.

(63) Ibid, 637a, 641d.

(64) Platon, Gorgias 451e, Symposium, 215a, 216de, Menon, 80a, Politeia, 479b.

(65) Jaeger, Paideia I, p. 107 ff.

(66) Ditto.

(67) Platon, Protagoras, 483e.

(68) Ibid, 322b～c.

(69) Ibid, 322d.

(70) Ibid, *μετέχειν δικαιοσύνη τε καὶ τῆς ἄλλης πολιτικῆς τέχνης* 323a.

(71) Ibid, 323b. *τῆς ἀρετῆς, εἰ μέλλει πόλις εἶναι, οὐδένα δεῖ ἰδιωτεύειν.*

(72) Ibid, 543a.

(73) Aristoteles, Politica 1337a, 1, 3～4. 1337a, 21～29.

(74) Platon, Poleteia 528cd.

(75) Ditto, Nomoi, 760c.

(76) Bury, History of Greece, pp. 826～8.

Freeman, School of Hellas, c. VII. Wilamowitz, Staat und Gesellschaft. p. 127. Platon, Nomoi 663c, 763b.

(77) Idem, History of Greece. p. 220.

(78) Platon, Nomoi, 819d.

(79) Ibid, 821d, 822c.

(80) Burnet, Greek Philosophy, pp. 347～8.

(81) Platon, Nomoi, 810e～811a.

(82) Ibid, 811de.

(83) Ibid, 812c.

(84) Ibid, 667d. Ditto, Protagoras, 326ab. Freeman, School of Hellas p. 109.

(85) Platon, Nomoi, 659de.

(86) Freeman, op. cit. p. 212.

第三節　教育の理念

ギリシア文化は人間に最も直接的なる生の欲求（ἐπιθυμία）から出発して、人間を永遠なるものに導くことを目指した人類の文化の先達である。人間の欲求を人間的なるもの（ἀνθρωπίνως）としてとらえ純粋にして永遠なる形相（εἶδος）につくり上げてゆくことがギリシア文化の特色である。アリストテレスがいうごとく、人間の生活は目的（τέλος）を目指して、人間のすべての願望（βούλημα）の根拠となる最高善（ἄριστος）をめざしている。善にも個人的な善もあれば、団体的・国家的な善もあるが、団体的国家的の善を実現することの方がより高次であり、より究極的である。(1)

人間の幸福（εὐδαιμονία）は快楽（ἡδονή）徳（ἀρετή）と思慮（φρόνησις）であって、これらを綜合して、プラトンは魂（ψυχή）の三つの部分のうちに、これに相応するものとして、理性的なもの（λογιστικόν）、情感的なもの（θυμικόν）、欲情的なもの（ἐπιθυμητικόν）を配している。しかして、これらのうち、最高の価値と真の幸福は知識を愛する哲学者に与えられるのである。(2)

ピタゴラスはオリムパスの祭典に参加する人々を3種に分けて、或る者は見物人に商品を売って利益を得るためにゆき、或る者は勝れた体力と演技を誇示し名声を得るためにゆき、また或る者は競技者の美わしい演技を見て美のイデアを観想する（ἡ τὸν κάλλιστον θεωρία）ためにゆく。(3) 理性の与える愉悦は他の何ものよりも大なる悦楽である。理性の与える喜びを感受する人が真の悦楽者であって、かくのごとき人が哲人であり、国家の支配者（ἄρχων）でなければならない。(4)

プラトンは80年の生涯を通じて渝らないポリスの哲人であった。彼は度々の失敗にも拙せずにシラクサに赴き僭主ディオンを説いて、人間を教育するための理想国家を建設し、人間を有徳にせんとの大望を懐いていた。真の知識と正義によって支配される国家が唯一の真正なる国家とし、現家の国家はかかる理想国家を目指すものとし、哲人と知識ある王との協力によって国民を有徳にし、最大の幸福を実現せんとする理想とその実現への情熱は終身消えることはなかった。

アテネ人は一般に議論好き（φιλολογία）であり多弁で（πολιλόγος）であった。[5] ロゴスは議論であり、論理である。プラトンはロゴスを愛し、真理を熱愛した人であった。彼はロゴスの導くところに従ってゆく（ὁ λόγος φέλει, ταύτη）人であった。[6] しかしアテネ人のうちには理論には全く関心をもたないで、体育に専念する若者も多かったので、プラトンはこれらの人に対して、言論や文芸（μουσική）に関心をもつことなくして体育（γυμναστική）に専念する人は、理論を嫌い、非文芸的な（ἄμουσος）人であるとのべている。[7]

プラトンの教育の殿堂アカデメイア（'Ακαδήμεια）に属するアカデメイア学派（'Ακαδημικοί）に対して修辞学（ῥητορική）を教科の主要科目としたイソクラテス学派（'Ισοκρατοί）が対抗してきた。修辞学はソフィスト達によって論争の武器として用いられた。それ故に、論争の形式（ἀγωνιστική）として弁論術（εὐλογία）とともに修辞学が抬頭してきたのである。[8] また一般民衆の読書のため(ἀναγιγνώσκειν)に読本（γράμματα）が著わされ、ホメロスの原典、ヘシオドスの詩、その他の叙事詩・抒情詩・悲劇作家の作品が含まれていた。アテネにおいては言語も哲学も文学もその他の芸術もすべては純粋であり、人間的で（φιλανθρώπως）あり、精神的にも肉体的にも善美の理念（καλοκἀγαθία）によって導かれていた。一般に当時のギリシア人は想像力は広大で深く、教養は広く、道徳的理念も高く、人間性が豊かに浸透していた。ギリシア哲学にはギリシア人に理念と人間性をロゴスを通じし認識せしめ、生（βίος）と理（λόγος）との調和と統一を自覚せしめ、哲学こそ人間性形成の教育(παιδεία)の学であった。[9]

ギリシアにおける学校はプラトンのアカデメイアが最初のものであった。ソクラテスは学校をもたずに、市井において青年を教えた。ソクラテスは神から遣わされた使徒として街頭や市場（ἀγορά）において、アテネ市民を教化し啓蒙したのである。他方においてはプロタゴラスをはじめソフィスト達は自宅や富豪の邸宅においてその子弟を教え、立身出世するための方便としての知識を授けていた。B.C.387年40才に達したプラトンは、初めて国外旅行に出かけシケリア（Σικελία）に行き、あこがれのピタゴラス教団の学園を訪ねた。当時メガラ（Μέγαρα）にあったエウクレイデスの学校を範として、アテナイ

の子弟の教育に身を投ずることを決心した。彼はヘレナの伝説にある英雄ヘカデモスの聖地アカデメイア（*'Ακαδήμεια*）を選んで校地とした。そこには篠懸木の並木路のある遊園地と用水の設備のあるギムナシオン（*γυμνάσιον*）（体育場）があった。そこはまた恩師ツクラテスの学徒の集会の場所となっていたのであった。そこには土地の主神アテナ女神（*'Αθηνᾶ*）が守護神のヘパイストスとプロメテウスと並んで祭られていた。アカデメイアの入口にはエロス（*''Ερως*）の塑像及び祭壇があった。アカデメイアにはギリシア全土の各地から研学精神旺盛な若者が遊学してきた。アカデメイアとポセイドンの丘との間にあるケフィソス河畔に学舎アカデメイアを創設した。アカデメイアは創立以来年とともに画期的な発展を遂げ、その資金も豊かに得ることができるようになり、529A.D.ユスチィアヌス帝によって閉鎖されるまで凡そ1000年間続いたのである。

ギリシア語の教育 *παιδεία* という語は児童の育成を意味する。それはプラトン精神の真髄をなすものであって、人間のうちに潜在するイデアによっての人間の人格形成である。人間の魂のうちに潜在する能力を覚醒せしめて発展せしめることがパイデイアである。[10] イデアを内面的に諦観することによって真理に触れしめて、人間を自然的に向上発展せしめることである。潜在せる善き美わしきものを顕在せしめて、より善い、より高い、より美わしい人格にする人間形成である。盲目的なる眼に視力を与えること、眠っている人間の魂のうちにある心眼を覚醒せしめることがパイデイアである。[11]

人間の魂は3つの部分よりなり、知性（*νοῦς*）は知恵を担当する。気概（*θυμός*）は勇気の座として正義のために水火を辞さない態度を示す。欲情（*ἐπιθυμητικός*）は欲望・所有欲の性格を有する。魂の正義はこれらの各部分が秩序を保ち、全体の調和が実現されるとき示現する。魂の健康・人格の健康が正義の実現である。国家に正義が実現するとき、国家は健康であり、国民も健康である。[12] かくのごとき国家状態において、国民の教育活動が完全に達成されることができるのである。正義の行われない不健康な国家は、プラトンによればオリガルキア（*ὀλιγαρχία*）であり、アリストテレスによればプルトクラチア（*πλουτοκρατία*）とよばれるもので、最も低次なる国家である。金に比例

して徳性は下落する。宝の庫をつくることを念願とし、これによって栄枯盛衰が定まるのである。[13]

民主国家（δημοκρατία）は無秩序、訓練の欠如、無能力の礼讃、無資格の者でも権威ある地位に就くことができる。民主国家においては全く訓練を受けることなく、その資素について何等の吟味をなすこともなく、栄職・権勢を手に入れることができる。ただ大衆国民（πολλόι）の友であるとまことしやかに笑を浮べていいさえすれば誰彼の見さかえもなく顕職に選出されることができるのである。民主国家は民衆煽動家の悪徳を育くむものである。[14]

民主国家においては自由である。思うことは何んでも思い通りに行動することができる自由がみなぎっている。[15]民主制の最高の願望であるところの飽くなき自由への貪欲は却って自らに対して終止符をうつことになる。かくして国民は民衆煽動政治家の手中に操られることになる。極端な自由から最もひどい隷従が生じてくるのである。[16]

しかし、人間の本性には古往今来変化があるものではない。人生における美わしいものへのあこがれ、真理への愛求、善きものへの渇仰ということには変わりがないのである。よき国民をつくるものは人格の本質をなす品性の教育であり、善美と真理への憧憬であり、国家に対する熱愛である。国民を結びつける紐帯は同胞愛であり、友愛であり、共同精神であることを知らねばならないのである。

アテネにおける教育理念の変化を示すものは B.C. 450 年頃であると思われる。B.C. 423年のアリストファネスの雲によれば、父は放縦に溺れて無軌道な息子のために莫大な借金を背負わされ首がまわらなくなる。そこで父は息子に新らしい教育をうけさせるために息子をソフィストの学習塾に通わして、借金を追払う術を学ばしめる。やがて息子は術を教えるところ(φροντιστήριον)で学んだ術を用いて借金取りを追払うことができた。しかし、息子は学習塾で習い覚えた三百代言の術を用いて父をなぐり、その正当理由を堂々とのべるのである。父は息子の受けた新しい教育の恐ろしいことを痛感し、怒って息子を教育した学塾を焼き払わんとするのである。ここに描かれていることは旧教育における倫理的特性、正しい論理（δίκαιος λόγος）に対する新教育の三百代言

式の不道徳性、不正な論理（ἄδικος λόγος）が対立する。旧教育の倫理的徳性に対する新教育の詭弁的不道徳性があらわれている。ヒュジス（φύσις）に従って真なるものはただロゴス（λόγος）のみである。これに対して、普遍妥当的客観的な知識の存在を否定して、時と処と人とを異にして、その時、その処、その人に都合がよいと思われる主観的な臆見（δόξα）をもって、俗識として通用せしめんとする。旧い倫理を打倒して新しい倫理が抬頭し、伝統的倫理観に立つ教育は危機に瀕したのである。アテナイの光輝ある伝統は消滅の危機に瀕し、新しい非倫理的教育が抬頭した。[17] 伝統的な神は既に姿を消して、天空にはただ巨大なる暖炉があり、雲こそは太陽に代って自然現象の原因であり、神に代って雲が信仰の対象であった。雲以外のものはすべて空しい言葉にすぎなくなったのである。フロンティステーリオンはアルケラオスの学塾をモデルにしたものであるといわれている。[19]

アナクサゴラスは万物の原因は理性（νοῦς）であると説いた。これに感動したソクラテスはヌースこそ、それ以上の原因のない終局のものとして欣求したのである。当時アテナイのソフィスト達は、人間が国家社会において顕要の地位に栄世利達するための術を教えたのであって、彼等は処世術の知恵の教師（σοφιστής）であった。彼等の教育観は立身出世の術知（τέχνη）を授けることであって、ソクラテスやプラトンの重視するロゴスに基づく学知（ἐπιστήμη）や善美のイデアを諦観に到達せんとするように子弟を導びかんとする教育観とは対照的なものであった。[20]

(1) Aristoteles, Eth. Nic. 1, 5, 1005.

(2) Platon, Politeia, 580d～583a.

(3) Burnet, Early Greek Phrlosophy, 1920, p. 98. Diog. Laert., VIII, 8.

(4) Xenophon, Memorabilia, III, 9.

(5) Platon, Nomoi, 611e.

(6) Idem, Politeia, 394b.

(7) Ibid, 441c.

(8) Aristoteles, Melapheysica, IV, 2, 1003b.

(9) Diog. Laert, VIII, 8.

(10) Jaeger, Paideia, I.

(11) Platon, Politeia, 518b.

(12) Ibid, 540e～541a.

(13) Ibid, 545a～b.

(14) Ibid, 558bc.

(15) Ibid, 557b.

(16) Ibid, 563e～564a.

(17) Ditto, Nomoi, 908d～915a.

(18) Platon, Politeia, 365a.

(19) Burnet, Greek Philosophy, 1955, p. 147.

(20) Platon, Apologia, 20b.

第四節　ロゴスと教育（その一）

教育はロゴスの哲学であり、魂の哲学・心の哲学である。人を教えることは自己の究明でもあり、研究の中心問題は人間であり、人間の本質の自覚である。これがソクラテスの探究の中心問題であった。人間とは何であるか（*τί ποτ' ἐστίν ἄνθρωπος*）*τί ἐστίν* とはそのものをしてそのものたらしめている最も根本的なるもの、そのものの本質への問いかけである。ソクラテスの生涯はすべて人間探究への道であった。汝自身を知れとはこのことをいうのである。よく生きる、正しく生きるということはすべてこのことをいうのである。人間の本質は魂である。このことをすべてのアテネの人々に自覚せしめることがソクラテスの目指すところであって、これがソクラテスを市井の偉大なる教育者にしたのである。人間の本質問題、汝自身を知れとは哲学の中心問題であり、ロゴスの問題である。(1)

人間の本質はロゴスである。ロゴスを磨くことが哲学であり、教育である。人間としてあるがためには（*ἵν' ὡς ἄνθρωπος*）どうしても身につけねばならぬもの――それを知らなければ人間として恥辱であり、価値ないものである。善悪正邪、人間として当然なすべきこと、当然なすべからざること等については、すべて人間は何人も生得観念（*ἔμφυτος ἔννοια*）としてもっているので

ある。こういうことについては自然によって判断力を与えられているのである。それ故に人間は人間の行動について、善悪正邪を判断し、それを賞讃したり、非難したりする。かかる能力が先取観念（πρόληψις）であって、すべての人が共通にもっているものである。しかしこの観念だけでは十分ということはできないのである。生得的なもの、自然的（φυσικός）なものを更に成長発展さすためには、後から補わねばならない。このことを担当するのが哲学であり、教育である。それには自己の無能力の自覚、人間社会における矛盾の認識とその根源の探究が必要である。(2)

哲学することは自惚（οἴησις）を去って、真なるものを求めて精進せねばならない。自己の無知を自覚して常に知識を愛求し続けなければならない。無知無能を自覚し、ひたすら善きもの、真なるもの、美わしきもの、正しきものを求めて邁進しなければならない。

ヘラクライトスにおいては真理はロゴスとしてとらえられ、思索によってロゴスに耳を傾け、それに帰ってゆく人間のあり方が強調された。彼は「わたしにきくのではなく、ここに言われていることに耳を傾けて、万物が一つであることに心を注いで、万物が一つであることを認めるのが知というものである」とのべている。(3)

プラトンにおいてはイデア的存在のみが真の存在 ὄντως ὄν とされ、それが原型（παράδειγμα）となり仮象に関与（μέθεξις）する限り現象（φαινόμενον）となるのである。プラトンの認識の根源は太陽の明るさによって、われわれがものの存在を認知するごとく、善のイデアが認識の根拠となり、真理がイデアの下において与えられるのである。イデアのみが真の存在として超越的に志向される。(4) 真理（ἀλήθεια）はイデアとの合致に向う視向（ὁμοίωσις）によって与えられるものである。(5) ロゴスは個々のものを関連のうちに統べおき（das Eine zum anderen legen）、一つのものへととり集める（in Einen zusammen bringen）(6) ロゴスは眼前に存在するもの（vorlegen）に対して確乎たる地盤を形成し（Boden-bilden）根拠づけをする（gründen）ものである。(7) それは存在者をとりあつめ、これらを統べおきすえる働らき（die lesende Lege）で、世界の根本理法である。(8) すべての真理の本質は、原初的に存在するものとして

のロゴスによって思索され、人間の理性によって与えられ、すべての存在は人間の悟性（διάνοια）の対象とされる。[9]

アリストテレスにおいては、原初的なる存在の生命が生きつづけ、未完全なものより発して、完全なものへ向う途上にあるものとしてとらえ、すべて可能態（ἐνέργεια）として考え、現前へと現われてゆく(her-ins Unverborgene) ものであるとする。その顕現する方向はイデア的に完成に向って顕現する。しかしこれらを通じてその根柢に横たわるものは人間の理性である。人間の理性こそあらゆる存在の基体（Subjektum）であり、主体（Subjekt）であり、主体性（Subjektität）の根拠である。[10] かくして真理の正しさ（Rightigkeit）はロゴスによって確認され、ロゴスがその保証者となるのである。[11] ロゴスが知性の活動の源泉である。[12]

しかし、人間のロゴスは訓練（ἄσκησις）によって発動され、開発されてゆくのである。かかるロゴスの開発を掌ることが教育といわれるものである。よく教育されることによって、人はロゴスに従って生活ができるようになる。かくすることによって哲学的な生活といわれることができる。教育はすべて、ロゴスを働かす練習（γυμνάξειν）として行われ、小さいものから大きなものへと進まねばならない。教育はロゴスの自覚でありロゴスの共感である。

人間は学者であるだけでは人を教育することはできない。教育者としての自覚と準備と熟達が必要である。また神からの召命によってかかる地位を占めるに至ったという自覚が必要である。[13] 理性の開発を担当するという人間最高の要職は神の授命なくしては考えられないし、またかかる自覚ある者のみが真に人の師に価する。ここに教育は聖職であるということの意義がある。その使命に鑑み自然の素質、自分の力量の程度・熱意・熟練等について考えさせられずには先生にはなり得ない。[14] 哲学的教養は人が人間としての資格、世の中においていかなる困難にも善処できるために必要欠くことのできない準備である。

教育は暴力的・スパルタ式であってはならない。どこまでも合理的・主知的に行われねばならない。人は何人もそれが真であり、正しくあると知ったならば、これを行わないことはあり得ないというソクラテス精神に徹しなければならない。すべて過失は無知によるのであるから、道に迷える人を案内するよう

に教えてやるべきである。決して嘲笑をしてはならない。人が間違いをする原因はすべて無知である。無知を脱却する方法は学ぶことより他に方便がないので、教えてやるべきである。人々のうちにはロゴスにおいて不具なるものがいても、かかる人は跛や盲目の人よりも、もっと憐れみ同情すべきであって、嘲笑や怒りをもってすべきではない。[15] 哲学は知的なものであるけれども、究極は真実の人間をつくることを目的とし、真実の人間になることを教えるものである。哲学は決して論理のさいころを弄ぶように戯むれにやるべきものではない。蓄えておくのと食べるのとは別個の問題であるごとく、学ぶことはすべて蓄えておくのではなく、食べて消化して魂の栄養としなければならないのである。[16] 魂の栄養となるのは決して変わることのない永久の真理である。この永久の真理を求めるのが哲学である。（ἡ φιλοσοφία ἀεὶ τῶν αὐτῶν ἐστὶ λόγων）真理はすべて人間の理性に根ざすものである。[17] 知識のみが永久不変である。（ἐπιστήμη οὐδαμῶς εστὶν ψευδής）[18]

教育ということは訓練によって、魂の内奥において普遍の真理があることを認知せしめることである。この認知する能力は先験的に魂に本具するものであって、a priori なるものである。各人はそれぞれ永久不変の真理を認識する能力を有し[19]（ἔχειν αὐτὰ αὑτῶν τιὰν βεβαιότητα τῆς οὐσιάς）、ここに永久不変の知識の可能性の根拠があるのである。[20] かかる普遍妥当的な知識（真理）の認識の能力はロゴス（λόγος）に基づくのである。人間の有する諸能力のうちで最高のものである。ロゴスのうち認識理性としての働らきをするものが διάνοια とよばれ、実践理性として道徳的能力を表わすとき προαίρεσις といわれる。主知主義の立場をとったソクラテスにおいてはディアノイアとプロアイレシスとは同じ意味に解され、広義のプロアイレシスはロゴスと同義に考えられる。

ロゴスが個人のうちにあるときそれは個的なロゴスであるが、それは宇宙ロゴスの断片として同質のものである。ただ個的なロゴスは有限なるものであり、他の非ロゴス的なるものとともに魂のうちに存在しているので、純粋なる宇宙ロゴスと異なるところがある。個的ロゴスは有限であるが故に完全ではないが常に宇宙ロゴスへの随順を忘れることができない。宇宙ロゴスへの随順に

よって絶えず軌道修正を行っているのである。ヘラクライトスはその断片のうちにおいて「万物の生成はすべてロゴスの指図によるものであるが、そんなことは知らないようである。そのことに耳を傾けて一切のものが一であることを認めることが智というものである」とのべている。[23]

ソクラテスは人間において大切なことは生きることではなく、よく生きること（εὖ ζῆν）である。[24] よく、正しくということは魂のうちにあるロゴスからくるものである。それは与えることのできるものではなく、自ら目覚ましめる以外に方法のないものである。ソクラテスの助産術とはこのことをいうのである。何事も本人を自覚させる以外に教えるということは不可能である。理性的存在者としての人間にとって道理に合わないものは受付けられないし、道理に合うものにはこの上なくひきつけられ受付けねばならなくなる。[25] かくのごとき理性的存在者としての人間の魂のうちに存する道理のわかるロゴスに着眼して、眠れるロゴスを覚醒せしめることがソクラテスの街頭における青空学校であった。彼は助産術によってひき出すのではあるが、そのひき出す方法は対話術（διάλογος）であった。対話術の根柢をなすものは、次のような考えによるのである。人間が知を求めるのは天賦の資質である。神の知と人間の知とは同質である。ただ人間の知は、神の知の全体に対して部分の知である。人間の知はそれ故に、互に神の知の分身であり、兄弟であり、同質である。この考え方に立って彼は自分がロゴス的によいと思うことは必ず他人もロゴス的によいと思う、自分が正しいと思がうことは他人も正しいと思う。ここに教育の根柢がある。かくして彼は街頭において自然に教育をするようになったのである。ソクラテスは、自分で考えて見て、自身の最もよく、正しいと思う道理（ロゴス）に従って教説した。[26] 人間の生活はロゴスによってのみ理解され承認されるものでなければならない。吟味のない生活は人間にとって生きがいのあるものではない。[27]（ὁ δὲ ἀνεξέταστος βίος οὐ βιωτὸς ἀνθρώπῳ）

よき魂、ロゴスに導かれた魂のみが一切のものをよくすることができる。よき魂とは思慮（φρόνησις）ある魂、理性を十分に働かした魂をいうのである。アンティステネスがソクラテスに弟子入りをしていたとき、友人から何を学んだかときかれて、「自分自身を知ること」と答えた。（τὸ δύνασθαι ἑαυτῷ

ὁμιλεῖν）自分自身のロゴスの力を自覚したことをのべている。これは全くデルフォイの神託である汝自身を知れ（*γνῶθι σεαυτόν*）と同じ意味である。ソクラテスはカイレフォーンの神託において、ソクラテスよりすぐれた者は誰もいないということについて不思議に思った。[28] 実際にアテネには彼よりすぐれた人は無数に沢山いる筈である。しかし神が嘘を告げる筈がない。名声のある者、富貴なる者、権力ある者は数限りなくいるが、人格において善美なるもの[29]（*καλὸν κἀγαθόν*）はソクラテスに及ぶものがないという意味であった。

一般に栄世利達の人々に会って見ると思慮深さ（*φρονίμως ἔχειν*）の点において欠けていることが明らかになった。彼等は知恵によるのではなく、一種の神がかり（*θεία μοῖρα*）インスピレーション、正しい臆見によっているのであって、ロゴスとは全くかかわりのないものである。彼等について、共通して言えることは、彼等が何も本当のことを知っていないのに、知っていると思っていることである。人間としてもつべき知恵（思慮 *ἀνθρωπίνη σοφία*）を欠いている。これがなければ真の意味での人間失格である。彼等は本当に自分が真知について何も知らないことさえも知らずにいる。彼等は謙譲ということを知らない。巫女のごとくに自分のいっていることさえも知らない。彼等の知識は職業についての専門的のもので、すべての分野に亘る高次な本質的のものではない。[30] 彼等は価値あるものを粗末にし、無価値なものを尊重する。世の中のすべてのよいものは、徳のあるすぐれたロゴス的な魂によって、はじめてよいものとなるのである。[31] ソクラテス教育の根本問題は人間の魂そのものであって、人間の所有するものについてではない。彼は何も知らないで知っていると思っている人々を自覚させ、人間として最も大切であるものに専念するように仕向けることが教育者の使命であると考え、それを実行したのである。

(1) Epikteitos, Diatribai I, 4, 30.

(2) Ibid, II, 24,19.

(3) Herakleitos, No. 50. *οὐκ ἐμοῦ, ἀλλὰ τοῦ λόγου ακούσαντας ὁμολογεῖν σοφόν ἐστίν ἓν πάντας εἶναι*

(4) Heideggar, Einführüng in die Metaphysik, 1953, s. 137.

(5) Ibid, s. 141.

(6) Ibid, s.95.

(7) Idem, Der Satz vom Grund, 1975. s. 179.

(8) Idem, Vorträge und Aufsätze, 1954. s. 212.

(9) Idem, Vom Wesen und Begriff der φυσίς. s.288.

Idem, Platons Lehre von der Wahrheit, 1947, s. 49 ff. Müller, Ekistenzphilosophie im geistigen Leben der Gegenwart, 1949, s. 23.

(10) Heideggar, Holzwege, 1950, 2aufl. 1952, s. 122 ff.

(11) Idem, Einführung in die Metaphysik, s. 143.

(12) Ibid, s. 142.

(13) Epikteitos, Diatribai, III, 21, 12,

(14) Ibid, III, 1, 22.

(15) Ibid, I, 26. 5～6.

(16) Ibid, I, 17, 17.

(17) Platon, Euthydemus, 482a.

(18) Ibid, 454d.

(19) Ditto, Cratylos, 386a.

(20) Ibid, 386c.

(21) Epikteitos, Diatribai, I, 14, 1.

(22) Ibid, I, 4, 2.

(23) Herakleitos, Fragment, I, 4, 50.

(24) Platon, Criton, 48b.

(25) Epikteitos, Diatribai,I, 2, 1.

(26) Platon, Criton, 46b.

(27) Ditto, Apologia, 38a.

(28) Ibid, 21a.

(29) Ibid, 21d.

(30) Ibid, 38a.

(31) Ibid, 29d～30a.

第五節　ロゴスと教育（その二）

生徒が先生を軽蔑し、先生は生徒に迎合し、権威主義から遠ざかる教育の欠陥、過度の自由（ἡ ἄγαν ἐλευθερια）は疲労を生み、野蛮な隷従をかり立てるに至るのである。かくて民主主義は僭主主義に逆転する可能性を含んでいる。(1)

民主主義国家においては、各人が自主的に自分が自分自身の面倒を見ること（ἐπιμελεῖσθαι αὐτοῦ）、自分の魂の面倒を見ること（τῆς ψυχῆς ἐπιμελεῖσθαι）徳の面倒を見ること（αρετῆς ἐπιμελεῖσθαι）自分のうちなるものに関心をもつことが大切である。徳（ἀρετή）とは卓越性で、すぐれた能力を指すのである。男子の徳は男らしく勇敢であることであり、大工の徳は立派な家を建てることであり、肉体の徳は健康で均斉がとれて美わしいことである。(2) 魂の徳は知る働らきであり、知る働らきの卓越である。これが人間の固有の徳である。人間の固有の徳は魂の徳（ἀρετή τῆς ψυχῆς）である。(3) 魂の徳は人倫の徳として知恵（σοφία）勇敢（ἀνδρεία）節制（σωφροσύνη）正義（δικαιοσύνη）敬虔（ὁσιότης）の五徳がある。これらのものが魂の徳である。すべての徳は知恵（σοφία）、思慮（φρόνησις）によって支配されねばならない。知恵は大なる利益をもたらすものである。この意味において知恵は最大の徳である（τὸ μέγιστον ἀγαθόν）。(4) 人は徳を身につけることによって幸福（εὐδαιμοία）を得ることができるのである。それゆえに徳の教育が必要である。

人が求める善いもの（τὰ ἀγαθά）は沢山あるが最後の目的は幸福である。人間のあらゆる追求の目的は幸福である。(5) 幸福は最も問題のない善（ἀναμφιλογώτατον ἀγαθόν）である。(6)

肉体に対する魂の優越、外面に対する内面の優越は、魂が不滅の実在であって、イデアの世界に関与するからである。(7) 魂を欲望から解放して理性が支配をすることが、よく生きること（εὖζῆν）であり、幸福に生きることである。かくてソクラテスの幸福主義はロゴスによって支配されることをいうのである。(8) ロゴスによって支配されないものは知者でもなければ思慮ある者でもない。(9)

プラトンの時代のアテネにおける倫理的基礎は人間を正しいロゴスによって

吟味することであった。かくして世俗的な徳を浄化することがソクラテスのアテネ市民に対する教育の方法であった。価値意識をもって、主観的な判断を客観化しようとする客観的精神の顕われである。ソクラテスは習俗的な徳目を吟味して客観的な価値的な徳の創造に立ち向ったのである。カルミデスにおいては節制、ラケスにおいては勇気、リシスでは友愛という徳目について吟味がなされている。プラトンにおいては何が（τὶ εστί）ということは概念（Begriff）よりも教育的能度というべきである。プロタゴラスやメノンにおいて、徳とは何かという理論の問題と徳は教えられるかという実践・教育の問題が論ぜられている。特にメノンにおいては諸徳の綜合問題として、徳の教育可能問題から徳の本質問題へと帰納的に探究している。[10]

健康も強さも美しさも常に知（φρόνησις）によって正しく用いられるときにはじめて善であり得る。人間も善であり得るためには知によって支配されねばならない。徳は知恵（σοφία）または知識（ἐπιστήμη）でなければならない。徳が知識であれば教えられるはずである。ユウティフロンにおいて「おゝユウティフロンよ、私は敬虔とは何であるかを問うているのに、君はその本質（οὐσία）を示そうとしないで、それのある様態（πάθος τὶ）を語ろうとしているとのべている。[11]

ソクラテスは知恵（φρόνησις）と知（σοφία）と知識（ἐπιστήμη）とを区別しない。アリストテレスは徳は知恵（φρόνησις）、ロゴス（λόγος）と考えた。[12] クセノフォンは正義並びにあらゆる徳が知（σοφία）であるとのべている。[13] 知識は長い間の訓練や教育（παιδεία）によって備わる者に備わるようになるのである。[14] 知識は生れつき（φύσει）備わるものでない。知識には二種があって、一はエロス的関係のある本来的な知識であり、他は断片的な単なる様態にすぎない知識である。それ故に教えること（διδάσκειν）にも二義がある。一つはプロタゴラス篇のソクラテスの指摘するような意味においての教育（παιδεία）であり、他は様態的な知識に対応するものとしての単に与えられるという意味においての教授（δίδαξις）である。エロス的につくり出すことを意味する学習（μάνθανειν）即ち想起（ἀναμνησίς）と断片的に受ける意味の学習がある。[15] エロス（ἔρως）は形成的媒介者であって、神的なものと人間的なものとの中間

的なものであって、形成的中間者（μεταξύ）といわれる。

プラトンはメノン篇において、すべての人間は同じ仕方において善である。何故なれば、同じもの（徳）を具えることによって善となるからである。[16] 徳には老若男女の区別なく、正義・節制が必要である。正義と節制とはすべての人々に妥当する徳目である。現世の地位や身分に関係なく徳の本質的普遍性に注目したことはソクラテスの徳論の中核をなすものである。ソクラテスは徳論であるアポロギアにおいて、アテネ市民に対して「私は諸君よりも神に従う」とのべている。[17]

(1) Platon, Politeia, 563c～564b.

(2) Ditto, Gorgias, 504c.

(3) Ditto, Protagoras, 329c.
Symposium, 196d.
Euthydemos, 279b.
Politeia, 427e.

(4) Ditto, Menon, 72a.

(5) Ditto, Symposium, 205a.

(6) Ditto, Menon, 70c.

(7) Ditto, Symposium, 219e.

(8) Aristoteles, Nicomachos Etica, 1103a 10.

(9) Platon, Menon, 65d.

(10) Ibid, 73b.

(11) Ditto, Euthyphron, 11ab.

(12) Aristoteles, Nicomachos Ethica, 1144b 3.

(13) Xenophon, Memorabilia, III, ix. 5.

(14) Platon, Theaetetus, 186c.

(15) Ditto, Symposium, 215b.

(16) Ditto, Menon, 73c.

(17) Ditto, Apologia, 29d.

第六節　教育と政治

最初人間が生まれるとき、神は土の中で人間を形づくったが、或る者は金を混ぜ、或る者は銀を混ぜ、或る者は銅や鉄を混ぜて人間の原型をつくった。母なる大地がこれらの原型の人間を大地の上に送り出した。現在の人間はこれらの原型人間の子孫であるから、金の要素をもった人間は最も優れた者として国家の支配者となるべきであり、銀の要素をもった人間は支配者の補佐人や武人として行政や防衛に当るべきであり、銅や鉄の要素をもった人間は職人や商人や農民となるのが適当である。しかし彼等はすべて母なる大地から生まれた同族であるから、その両親の組み合わせによって、金の親からも銀・銅・鉄の子が生まれたり、逆に銅・鉄の親からも金・銀の子が生まれる。金の子は支配者となるように、銀の子は行政者・武人となるように教育されねばならない。また銅・鉄の子は農・工・商に従事するように教育されねばならない。世襲制を許されないのが神託であり、銅・鉄の子が支配者や公務員となれば国が滅びるというのも神託（χρηστήριον）である。(1)

プラトンの国家論においては統治者（ἄρχων）は一切の不動産・動産をもたず、生活資料の一切を庶民階級から支給されていた。それ故に統治者は一般庶民の生産と財産の保護をするように統治を行うことになっていた。(2) 支配者は世襲ではなく、あらゆる学を修め、特に高等数学に通暁することが第一条件とされ、天文学・修辞学等を修得し、30才より哲学の修練に入り、訓練と思索によって50才に達して統治者たるの資格が得られることになっていた。(3)

プラトンは更にプロタゴラス篇おいて、人間をはじめ各種の生物をつくり出す役目を担当したのはプラメラウス（Προμηθεύς）とエピメテウス（Ἐπιμηθεύς）であるとする。土の中に生物の原型をつくり、地上での生存のための準備を施した。しかし人間は力が弱いので集団をつくり、団体の力によって人間の生存を維持するようにすることを忘れていた。そこで、ゼウス（Ζεύς）の大神はヘルメス（Ἑρμῆς）を遣わして、正義と羞恥という二つの市民の徳（πολιτικὴ ἀρετή）を人間に配分した。正義心によって他人を犯すことなく、羞恥心によって他人をおそれ尊重する。この二つの徳は国家を堅く結合する友

愛の絆であり、人間の集団をつくるための術（πολιτικὴ τέχνη）である。[4]

政治的な徳は知識であるにしても、かかる知識は教えられない。[5]若し徳が教えられるものであるならば、ペリクレスのような大政治家の子が何故不肖な子であったのであるか。彼の息子は恰も家畜のごとくにうろつきまわり、牧草をも食むという類の人間であった。[6]これを教える道は対話を通して相手の臆見ドクサ（δόξα）を否定反駁（ἔλεγχος）することである。ソクラテスの教育法はエレンコスの雨を浴せてドクサの世界から真知（ἐπιστήμη）の世界へと魂を転回（περιαγωγή）することであった。[7]しかし一人の人間が一つの学術を身につけて職業に励み乍ら且つ政治に参加することは無理である。ここに一人一職の思想があらわれている。自分の素質に適した一事を選んで全精神を傾倒することが最も大きな成果が得られるのである。[8]

民主主義の下においては人々は自由であり、国家は自由（ἐλευθερία）に充満し、言論の自由（παρρησία）が跳梁している。欲することは何でもできる自由がある。[9]能力・素質に関係なく、民衆に好意をもっているとさえ言えば政治家になれるのである。[10]民主主義は欲望を無制限に解放し、欲望の大群を生み出す。かくして市民は暴慢不遜、無恥無秩序、奢侈狼費となる。[11]民主主義を楽しんでいるうちに無政府状態が出現する。親は子を恐れ、教師は生徒を恐れて御気嫌をとり、生徒は先生を軽蔑する。年長者は若者に迎合し、権威から遠ざかる。何事も過度に走れば大なる反動を齎らす。過度なる自由（ἡ ἄγαν ἐλευθερία）は疲労を生み、野蛮なる隷徒への憧れをかき立てることになる。かくて民主主義は僭主政治に逆転する可能性を含んでいる。[12]民主主義国家の最大の欠陥は理性が支配せずして、欲望が支配するからである。

プラトンの哲人政治の理論が実現され難いのは現実に欠陥があるからであって、理論に欠陥があるのではない。人間個人の人格の統制においても理性の部分（λόγος）が気慨の部分（θυμός）や欲望の部分（ἐπιθυμία）をよく統御するときに精神状態が最も正常で安定しているごとく、国家においても、理性の部分に当る哲人政治家が統治の任に当り、気慨の部分に当る武人や行政官がこれを助け、欲望の部分に当る経済人である庶民がよく欲望を節制してその分を尽すときに、国家は最も安定し、正常なる活動が行われるのである。[13]技術の神プ

ロメテウス（προμηθεύς）が天上より火を盗み出して人類に贈り、更に建築術・造船術・時間の見分け方・家畜飼養法等人間に教えた教育愛がある。[14] 更にまた、洞窟のうちに縛られて唯一方向のみの壁に写った影をのみ見つめている人間の日常の世界の外に赫々たる太陽を仰ぎ、それに照らされたイデアの輝く世界がある。洞窟と外界を繋ぐ入口が二つの世界のかかわりを暗示する。太陽は外の世界の一切のものの原因であるのみならず、洞窟内の一切の影の原因でもある。洞窟の壁に映る影像（σκία）を手がかりとして、外の世界において太陽に照らされて存在する真実なるもの、真実在（ἀλήθεια）を追求し、更にすべての真実在をして真実在たらしめている最高至上のもの（μέγιστον μάθημα）を究めなければならないのである。[15]

建築家が家を造るとき一定の形（εἶδος）を備えるように配慮する。種々の材料を統一的に組立てて家としての徳、すなわち卓越性（ἀρετή）を発揮し、家として役に立つ（χρηστός）ものであり、善きもの（ἀγαθός）である。すべて部分の間によき秩序がなければ、その全体としての性能（δύναμις）を発揮し得ない。秩序（κόσμος）により徳が発揮されるのである。秩序がそれぞれの存在を善きものにする。混沌（χάος）、無秩序（ακοσμία）は形相（εἶδος）という秩序を得ることによって善きものとなる。秩序を欠けば善きものを欠き、存在することにはならない。[16]

すべての善きものは、善きもののイデア（ἰδέα）が存在するもののうちに臨在する（κατέχειν）ことによって、その特有の性能・徳・善きものを発揮すること（φαίνειν）ができるのである。すべての善きものをして善きものためしめている善きものの統一者（κοινωνία）、統一的連関者（συμπλοκή）が必要である。すべてのイデアが皆善いものであり、善という理念を目指しているので、すべてのイデアの中心的イデアは善のイデアである。[17]

人間が真に人間であり得るのはイデアの諦観であり、永久不滅の神的秩序との一体化であり、宇宙を貫ぬく普遍的理性に没我的に帰一することである。

アリストテレスによれば、人は先づ感覚的質料としての実体であり、今ここにある、すなわち時間と空間によって規定されている実体である。しかし、それは形相（εἶδος）をそのうちに宿すところの実体である。形相が質料を統一

する統合体としての実体である。かかる実体が人格であって、形相的要素が最も多く、それ故に、純粋形相である神に近づくことができるのである。[18]万物は神にあこがれて動いている。神は不動であり、神に愛されるものを動かすのである。[19]

人間を含めて万物を統一的全体として統一しているものは宇宙的共同（κοινωνία）というべきもので、この共同により全宇宙の秩序が保たれる。一つの全体を成立せしめるものが神という至高の道徳的人格である。[20]

(1) Platon, Politeia, 414c.
(2) Ibid, 416a.
(3) Ibid, 540a.
(4) Idem, Protagoras, 320c～E.
(5) Ibid, 320b.
(6) Ibid, 320a.
(7) Idem, Politeia, 518d.
(8) Ibid, 370b～c.
(9) Ibid, 557b.
(10) Ibid, 558b.
(11) Ibid, 558d～559a.
(12) Ibid, 439d～e.
(13) Idem, Epistulae, 134a.
(14) Ibid, 123b.
(15) Idem, Politeia, 505a.
(16) Ibid, 506b.
(17) Ibid, 509a.
(18) Aristoteles, Metaphisica, 1029, 1042a.
(19) Ibid, 1072b.
(20) Platon, Gorgias, 508a.

第七節　アリストテレスに現われたプラトンの教育論

アリストテレスは先づ胎教から教育思想を述べているが、大体においてプラトンのノモイにおいて述べているものに類似するものが多いので、プラトンの教育論をアリストテレスを通して理解することによって、より一層深く把握することができると思う。

アリストテレスは先づ胎児の両親の生殖年令から論をすすめている。大体において生殖は男子は70才、女子は50才で終る。結婚早々子供を出産することは優生学上よいことではない。また若い者の早婚はよいことではない。他の動物の実験によって見ても、若いものの子には不具が多く、また形も小さいものが多い。人間においても同様のことがおこっている。また若い女は出産に苦しむことが多く、死ぬことも多い。[(1)] 貞節の点から見ても稍年がいっている方が有益である。若くして性交を経験した女は比較的放縦であるように思われる。男子においては種が成長しつつある時に性交を行うと、成長を損うことになる。それ故に、女子は18才頃、男子は37才頃がよい。かくすることによって出産の終期を一致せしめることができる。また子の相続についても、父親の盛りの時期が終った頃（70才頃）に行われることになる。[(2)]

子供をつくることについては、医者によっていわれること、自然科学者によっていわれていることを研究するのがよく、医者は自己の身体の好期がよいといい、自然科学者は北風よりも南風の吹く季節を奨励する。親の体質についていえば、競技者の体質は余りによいとはいえない。また労苦に適しない体質もよくない。 体質は労苦によって鍛えられたものでなければならない。 競技者のようにただ一つの労苦に適する者はよいとはいえない。一つの行為だけでなく、いかなる行為にも適しているものがよいのである。[(3)] 妊婦は安静にしていたり、粗食をすることはよくない。毎日いくらか歩くこと、精神を安静にしておくことはよいことである。胎児は植物が土壌の影響をうけるごとく、妊婦の影響をうける。また余りに年をとってからの子は、若い親の子と同様に、精神においても、身体においても劣った子が多い。子供をつくる時期は精神の盛んな時に合わせるべきである。その時期は男子50才頃である。この時期を４、５才

過ぎると、公のために子供をつくることを止めねばならない。貞節については、夫であり妻である限り不倫な行為は慎しむべきで、特に子供を生むことのできる期間においては、不倫者は市民権喪失をもって罰しなければならない。[(4)] 生れた子供に対しては乳分の豊富な食物が一番適している。酒分のあるものは一切避けられねばならない。運動は幼時に適するものは何んでもする方がよい。しかし手足が柔かいので曲がるのを防ぐように心がけねばならない。寒暑に対しては子供の頃から馴らしておくことが必要である。[(5)] このことは健康のためにも、軍事教練のためにも必要である。しかし習慣づけるには漸進的でなければならない。子供の体質は暖かいものであるから寒気に堪える鍛練をするのには本性上適している。[(6)] 5才までの年令は成長を妨げないために強制的な労苦に就かしめてはならない。身体が不活発になるのを防ぐための程度のものでなければならない。しかし遊戯は軟弱なるものであってはならない。子供に聞かせる話は子供の監督者（ἐπιστάτης）が配慮しなければならない。[(7)] 遊戯は子供が大きくなってからの仕事への準備に役立つものでなければならない。子供の監督者は子供の生活について監視し、7才までの者は家庭で食事をとるようにしなければならない。この年令の者は見るもの、聞くものから適わしくないものを受けて汚濁される危険がある。国家の立法家（νομοθέτης）は下品なるもの（φορτικός）を国から追放するようにしなければならない。[(8)] 不体裁な絵や言葉や振舞を舞台（σκηνή）から追放して見物させないようにしなければならない。役人達（δημόσιος）は心がけてこのような彫刻や絵画が一つもないようにしなければならない。[(9)] 国民は子供を自分のものと考えないで、国家のものであると考えねばならない。[(10)] しかし教育について大切なことは徳（ἀρετή）、最善の生活、知性（νοῦς）に関してである。[(11)]

普通の教育以上の高級なものは音楽・算数学・幾何学・天文学・哲学等である。しかし、いかに有用なものでもそれを学ぶ者を賤しいものにするような学習をしてはならない。身体・魂・知性・徳の向上に役立つものでなければならない。[(12)]

一般に国民に教育として教えるものに大体4つある。それは読み書き・体操・音楽・図画である。読み書きと図画とは生活にとって有用であり、体操は勇

気に貢献するところがある。更に勤労と遊戯も欠くことのできない科目である。勤労は骨折りと緊張の伴うもので精神をひきしめ、遊戯は精神の緊張をほぐし、それからくる快楽は魂の弛緩であって、休息でもある。勤労をするのはある目的が存するためであり、その目的を果すことが幸福（εὐδαιμονία）である。人々を教育する者は有用なもの（χρήσιμος）としてよりも立派なもの、有徳なもの（ἀγαθός）を教えねばならない。[13]国家は国民がもって生れた本性を完成するように教育し、真の人としての人格を形成するようにつとめねばならない。[14]

教育は理（λόγος）よりも先に習慣（ἔθος）によって行われねばならない。

スパルタの教育に見るような身体の形状や成長を歪曲してまでも競技的体質を作りこむことは、労苦によって人を獣的なものにするものである。体育は人を獣的ものにするものではなく、健全で立派な体格を形成するのが目的である。危険を競って冒す狼であってはならず、勇敢な人間でなければならない。オリムピアの勝利者で一生を通じて勝利者である者はない。若いときに余りにもひどい訓練をうける者はそのために正常な力を奪われるからである。[15]

次に音楽については、エウリピデス（Euripides BC. 480～406）は憂愁（ἀθυμος）を鎮めるためであるというが、音楽を正しく観賞できるように訓練をすることは情操を高尚にし、知的な教養を豊かにするために役立つものである。[16]音楽は楽器だけにせよ、声楽と一緒にせよ最も精神を爽快にするものの一つである。音楽から生ずる快感は何等かの仕方で人間の性格を清めるもので、特に恍惚は魂の感動である。音楽は人の心を清浄ならしめ、正しさの徳を養い、正しい判断と有徳な行為をなさしめる。清潔な人格の形成にこれほど重要なものは他にはないのである。[17]音節や律動のうちに調和・勇気・節制・その他の倫理的性格が表現されて、人の魂を高揚せしめる。[18]音調にはドーリス式（Δωρίς）とプリュギア式（Πλυγία）とがあり、前者は荘重であるが、後者は情熱的である。[19]律動も音調と同様であって、或るものは比較的動的な性格をもち、人間の魂に与える影響が大きいものがあり、これによって情操が豊かにされる。[20]音楽の教育は若者がその年輩に適合したものとしないものとがあるから、それらをよく区別して授けなければならない。[21]いずれにしても音楽の立派

な音調や律動を喜び味い得るように訓練することが必要である。笛は倫理的性質を表現するものではなく、秘儀的宗教的興奮を表現するものである。従って笛を用いるのは、学修よりもむしろ祝祭等の際に情緒の浄めが与えられるような機会に対して適当である。吹笛の教育は知性に対して何等の寄与をなすものでもない。[22] しかし、音楽において演奏が競技めあてのものは避けねばならない。競技目当の教育は斥けなければならない。競演は自由人に適わしいものではなく、それは下司なものであって、低級なものである。[23]

音楽教育において最も大切なことは節付けと律動であるから、よい音楽とは節付けのよい音楽であり、律動のよい音楽であることを知るようにならねばならない。[24] 節付けは倫理的のもの、行動的のもの、熱狂的のものに分けることができる。それらのものはそれぞれ魂の浄めのため、高尚な楽しみのため、緊張と休養のために教育されねばならない。音節については、教育のためには最も倫理的なものがよく、音楽を聴いて楽しむためには行動的なものがよく、また熱狂的なものは魂を興奮せしめる。[25] 魂に対して強烈におこる感情は憐憫・恐畏・熱狂等である。魂を興奮させる音節を用いるときは宗教的な浄めを受けたようになる。また行動的な音節も人々に無邪気な喜びを与えるものである。[26]

しかし教育のためには最も好ましいのは倫理的な音節である。これにはドーリス式のものが最も適している。[27] ポリテイアにおいて、ソクラテスがドーリス式音階法とともにプリュギア式音階法を認めているのは適当とは思われない。というのはプリュギア式音階法は何だか笛の楽器のもつような色調をもっているからである。それは興奮的であり、感情的である。ディオニソス（Διόνυσος）的熱狂やバッコス（Βάκχος）的感動は笛によって最もよく表現される。音階法のうちではプリュギア式の音節において最も適した表現を見ることができる。ドーリス式音階法は最も落着きのあるもので且つ男性的なものである。[28] すべて極端を避けて中庸を得たものは、すべての音階法のうち、ドーリス式であるから、それは年少者の教育に最も適わしいものである。[29] しかし音階法に、これらの中間的なリュディア式（Λυδία）がある。この音階法は両者の中庸なものであって、これもまた音楽を通しての精神教育のために用いるべきものである。[30]

音楽は若者の善良なる人格（ἦθος）を形成する上において、大きな影響力を

もっていることは疑がない。若者の人格形成教育に最も大切な科目というべきである。[31]

次に弁論（διαλεκτική）は青年のうちで大度ある人々を鼓舞激励し、魂を高揚せしめ、優れた崇高なものを愛求し、徳を成就するための手助けとなるように思われるが、その反面において青年は善美に至ることを念願して身を慎しむというよりも、制裁の反報をおそれて、恐怖に支配され、名声を求めて、正善に就くように思われる。生れつきの廉恥心を鼓舞するように努めねばならない。青年は人生の種々の行為に経験が浅く、すべての論議は人生の体験から論ずべきものである。一般に青年は感情に従い勝ちであって、論議を聴いても空虚であって、身に応えるところが少なく、むしろ理窟よりも実践を尊ぶべきである。若者は大体において情念（ἦθος）に従って行動するからである。[32]

教育の理想は実用（πρᾶγμα）のためのみではなく、それを通じて他の多くの学習がなされるところの基盤をつくるために行われねばならないのである。常に目前の現実的なことのみにとらわれているということは志気高揚の若者にとっては適わしいことではなく、まことにわびしいことである。[33]

人間の人格は精神と肉体の二つから成っているように、精神には理性の部分と理性のない部分とがあり、それに相応して二つの働らきがある。一つは思惟であり、他は情意である。肉体がその発生において理性に先行するように情意や欲望は思惟に先行し小児に既にあるけれども、知性や思想は成長するにつれて発展してゆく性質を有するのである。それ故に肉体に対する配慮は精神に対するものより先行すべきものである。次いで意欲についての配慮がなされねばならない。意欲に対する配慮は思考のための配慮である。すなわち肉体の配慮は精神のための配慮にほかならないのである。[34]

健全なる精神は健全なる肉体に宿るのであるから、国民の体質は国民精神の基礎となる。健全なる体質から健全なる精神が生まれる。蒲柳の質のもの、勤労に適しないようなものは健全なる精神を宿すことができない。それ故体質は適度な訓練を施すことによって鍛えなければならない。しかし過ぎたるは及ばざるが如しであるから、過度や激烈であることは却って有害である。またオリムパスの競技者のようにただ一種の演技のみをめざしての訓練は人間の体質を

不具にするものであって、完全にするものではない。すべて身体の訓練は国民のあらゆる国家活動に適応できる目標をめざして訓練されねばならないのである。[35]

(1) Aristoteles, Politica, 1334b 16.

(2) Ibid, 1335a, 30.

(3) Ibid, 1335b 10.

(4) Ibid, 1336a 8.

Platon, Nomoi, 789a, 841b.

(5) Aristoteles, Politica, 1336a 10.

(6) Ibid, 1336a 20.

(7) Ibid, 1336a 30.

(8) Ibid, 1336b 10.

(9) Ibid, 1303a 26, 1337a 30.

(10) Ibid, 1337a 30.

Platon, Nomoi, 923a. 各人は国の部分であり、各部分に対する配慮は全体に対する配慮である。

Aristoteles, Nicomachos Ethica, 1180a 24.

(11) Aristoteles, Politica, 1337a 40.

(12) Ibid, 1337b 10.

(13) Ibid, 1338a 40.

(14) Idem.

(15) Aristoteles, Nicomachos Ethica, 1161b 35, 1339a 10.

(16) Aristoteles, Politica, 1339b 10.

(17) Platon, Politeia,401b～402a.

Nomoi, 659c～d.

(18) Ditto, Politeia, 395c～d.

(19) Ibid, 398d.

(20) Aristoteles, Politica, 1340b 20.

(21) Ibid, 1339b 4～5.

(22) Ibid, 1341b 32.

(23) Platon, Nomoi, 700a.

(24) Ditto, Politeia, 398d～e.

(25) Aristoteles, Poiētikē, 1449b 27.

(26) Ibid, 1342a 10.

(27) Platon, Politeia, 399a.

(28) Aristoteles, Politica, 1342b 15.

(29) Ibid, 1340b 3～5.

(30) Platon, Politeia, 398e.

(31) Aristoteles, Politica, 1340b 10～14.

(32) Ditto, Nicomachos Ethica, 1095a 3～9.

(33) Ditto, Politica, 1338a 38～61.

(34) Ibid, 1334b 16.

(35) Ibid, 1335b 5～10.

第八節　国家と教育者

国家における政治家の仕事は肉体における医者の仕事と同じである。[1] 政治家は国家の教育者である。教育者は医師であり、教育は治療である。健康な人々には更に健康を増進し、病める人々には病気を治療して健康を回復するようにする。初期においてはプラトンは、ソクラテス的思考によりエロスとロゴスの働らきによる教育を論じた。アナムネーシス（ἀνάμνησις）という学習法、助産術（μαιευτική）という教授法も人間の魂の本質的性格を示すものである。プラトンの思考は病めるアテネの国家をいかにして教育によって治療するかということであった。当時のアテネ国家は重病患者であった。プラトンはこれまで歴遊した国家を比較研究することによって国家の頽廃の原因を診断し究明したのである。[2]

プラトンは国民の教育においては説得（πείθω）と強制（ἀνάγκη）が必要であるとのべている。その説得の一つの方法に高貴なる嘘（γενναῖον ψεῦδος）の思想がある。国を救うためには高貴なる嘘を用いて人々を説得したいとのべている。[3] 国益のためには敵国人のみならず、同国人を欺くのは高貴なる嘘で

ある。国益以外のことで嘘をつくことは国家を危険に導くものとして罰すべきであるとする。[4] しかし、被支配者のために嘘と偽り（ἀπάτη）を用いることは差し支えはないという。[5] 高貴なる嘘も国民教育上の重要な手段の一つである。神話や太古の人々の言説を正当づけることも高貴な嘘である。神的なものをモデルとして描く画家として国家組織の下絵をするのも高貴なる嘘であろう。[6] このことはは国家の構想者であり展開者である政治家に必要である。

青少年時代における国民の学習はその年頃に適合するものでなければならない。この期間は特に健全なる身体をつくるために留意され、それが将来高度な学習の助けとなるように心がけねばならない。成長するにつれて魂の訓練が強化される。そして彼等が公民的義務や兵役の義務を遂行した後、彼等を自由に哲学させるようにしなければならない。[7]

支配者階級の子弟に対しては、個人的な逸楽、私財への関心、家族への愛着、肉体的快楽を抑制するようにされねばならない。国家内においては教育機関は共有であり、仕事も共有であり、すべてのものが共有物でなければならない。[8] というのは、個人的関心は国家の統一を乱す原因となるからである。[9]

国家の運命は若者の双肩にある。誤った仕方で教育され、教育者自身が自覚のない状態で活動することは、国を乱すことになる。アテネの専制政治も民主政治も、政治家が教育の原理を知らなかったので国を混乱に陥れたのである。いかに命令すべきかを知らない政治家、いかに服従すべきかを知らない人民、これは教育の欠陥に因るのである。アテネの病める国家の治療が必要である。それには教育によって国家・国民の体質を変えなければならない。これには哲人が王となるか、王が哲人となるのでなければならない。身体の健康には病気から遠ざける必要があるように、国家も一切の悪から遠ざけなければならない。[10]

理想国家は現実国家の原型（ἰδέα）であり、現実の国家は理想国家の模倣（μίμησις）である。現実の国家は原型の国家の性格の分有（μετέχειν）でなければならない。その分有の程度に応じてよりよくなり、その分有を失うにつれて堕落する。それ故に理想国家においては、教育は常にイデアを諦観することに向けられねばならない。理想国家においては教育の目的は理想国家の維持と

充実である。それがためには理想国家の維持と充実に適わしい人間形成が必要である。正義に基づいて国民組織を分けて、統治階級（ἀρχόντες）武人階級（στρατηγός）補佐官階級（ἐπίκουροι）生産者階級（δημιουργοί）に分ち、国家試験によって選別した各人の能力に応じ各階級に配分して一人が一事を担当する。[11] これらの階級の人々には理性的なもの（λογιστικόν）気概的なもの（θυμοειδής）欲情的のもの（επιθῡμητικόν）をその素質に応じて配している。理性は気概を指揮して欲情を統べ、知恵（σοφία）を実現する。武人階級や補佐官階級は理性の命に従って欲情を抑制する勇気（ἀνδρεία）の実現であり、生産階級は理性の命に従い、気概の統制に服し、欲望の調節し、節制（σωφροσύνη）を実現するのである。[12]

教育の第一課程は知的訓練ではなくて人格の訓練である。[13] 武人や補佐官になる者はすべてこの過程を通らなければならないのである。そして更に高度な教育を受けて国家の統治者の地位に就くのである。この段階においては、意志の訓練よりも知的な教育が第一義とされねばならない。普通教育の課程を修了後、更に選抜されて、高級の教育をうけ、十分な実地訓練を経て武人または行政補佐官に登用されるのである。これらの高級教育を修めた者のうち学力・識見・人格の特に優秀な者は選ばれて統治者の教育を受けることになる。[14] この段階においては意思の修練よりも、叡知の味得という知的訓練が主眼である。真にイデアを諦観できる境地に達した人でなければ統治者になるべきではない。国民を有徳に教育し、有徳な国家を実現することができないからである。これがプラトンの最高の理念であり、願望であった。[15]

当時アテネにおける市民の職業別階級を見るに、産業人（農・工・商）（δημιουργός）の階級と守護者（φύλαξ）の階級に分たれる。守護者は知的にも人格的にも優れ、国家を愛し、国家について配慮し、国家の利益のみを思念する人々である。[16] 守護者は補佐官（ἐπίκουροι）と完全守護者（τέλειος φύλαξ）に区別される。完全守護官は最高の守護者であって統治者（ἄρχων）である。

補佐官は統治者の補佐人であって、軍事（στρατιωτική）または警察（περιπολεῖν）を掌り、行政（διοίκησις）を担当し、統治者（ἄρχων）の命令の実施に当るのである。守護者以上の階級の者は私念を排し、公共精神に徹し、私

有財産を有せず、生活必需品は一般生産市民から供与されることになっていた。[17] その教育も至って厳正であって、音楽（μουσική）、体育（γυμναστική）、数学（μαθήματα）、行政学（διαχείρισις）、軍事学（στρατηγία）等について学習のみならず実地訓練が行われた。[18]

最高の地位に就く統治者（ἄρχων）は守護者のうち最もすぐれた人物でなければならない。統治者の選定は出生（γένεσις）によることなく、その人格（φύσις）が高潔であり、知的にも道徳的にもすぐれた人物であって、長い哲学的訓練に堪え得る能力のある人についてなされたのである。[19]

支配階級の人々はその職務に精励するために一切の私財を所有することを許されなかったのは義勇奉公の精神を徹底し、一つの道に精根を卓めて精励し、熟達することが有徳になることであるからである。若し自己の分限を忘れて公務を妄りにする者があれば、同僚が互に戒め合い、尚且つ妄る者は同僚によって排斥され被免された。[20]

第三階級の一般庶民は農商工等の産業を担当し、それぞれの分野の職域に奉公し、練磨熟練し、国民全体の需要を供給するための物資を生産することに専念した。それが庶民の徳であり、正義の徳の実現であった。庶民は私有財産の所有が許され、それによって国富、国の財政、国民生活の水準を左右する経済上の権力を保有していた。決して封建制度治下にあったようなみじめな庶民ではなかった。富を蓄えて殷盛するほどに職域に奉公することは、国富の増進に寄与するからである。庶民は絶対に政治に参与することを禁止されていた。[21] 一般庶民とても、一庶民所有の4倍以上獲得した者は、その超過分を国家に捧げなければならないことになっていた。[22] かくのごとくにして個人の過大なる富裕は制限され、金銭貸借による利子の取得は禁止されていた。[23]

国民の労働と職域は各人の素質と能力によって為さるべきであって、性によってなさるべきでない。[24] 国家はもともと多くの人々が、それぞれ共同し協力し合って、各自の能力・技能を発揮して、共存共栄の実をあげるために一定の居住地に集結することによって成立したもので、公共のために分業を行うことになる。[25] それ故に、国家内の人々はすべて自分の仕事をやるべき（τὰ ἑαυτοῦ πράττειν）であって、かくすることによって、人間としての生来の能力を開発

し、正義の徳（δικαιοσύνη）を実現し、各人の生活を享受することができるのである。これが最も健全なる国家のあり方である。国の静謐は武人や守護者（φύλαξ）が担当し、国家の支柱となって、国家に一意専心奉公すべきであった。国政の指導者は統治者（ἄρχων）であって、真・善・美の調和したイデアを諦観し思念しながら徳の政治を行ない、国家の繁栄と国民の康福を実現するために専念するのである。庶民はそれぞれの産業の分野において精励し徳を磨き国家に奉仕する。かかる国家が正義の実現された徳の国家であって、国民をしてかくのごとき夫々の分野に適合した人材を養成するのが、教育である。[26] それ故に、教育は国政の基盤であって、人は教育によってはじめて国民となり真の意味における文化の担い手としての人間（humanity）になることができるのである。教育は国民を善良なる市民（οἱ καλοὶ κἀγαθοί）にするために必要欠くべからざるものである。教育は国家の公事である。それ故国民にその能力に応じて平等に機会を与える公共教育（παιδεία κοίνη）は国家にとって必要である。かかる意味において教育国家は大そうすぐれた住家（ἄκρως οἰκοῦσα）であるということができる。[27] しかし、プラトンにおいては教育は自由民の子弟に対してのみ行われたもので、奴隷と混血の子弟に対しては学校も体育場も開放されなかった。[28]

(1) Platon, Politeia, 370a.

(2) Adams, The Republic of Plato, vol. II, p. 198.

(3) Platon, Politeia, 414c.

(4) Ibid, 389b.

(5) Ibid, 459c.

Ditto, Nomoi, 663e.

(6) Ditto, Politeia, 500d.

(7) Ibid, 498b.

(8) Ibid, 543a.

(9) Ibid, 375a.

(10) G. C. Field, Plato and his Contemporaries, p. 91.

(11) Platon, Politeia, 407c.

(12) Ibid, 376c～378e.

(13) Ibid, 430c.

(14) Ibid, 502e, 521d～522a.

(15) Nettleship, Essay in Hellenicus, p. 67 ff.

(16) Platon, Politeia, 412c～413a.

(17) Ibid, 414b.

(18) Ibid, 376c.

(19) Ibid, 326b, 328a, 473d. Perfect guardians of the state は Philosopher king である。539e.

(20) Ibid, 425de.

(21) Ibid, 413c.

(22) Ditto, Nomoi, 714a.

(23) Ibid, 920b.

(24) Ditto, Politeia, 785d.

(25) Ibid, 369c.

(26) Ibid, 374a.

(27) Ibid, 543a.

(28) Platon, Nomoi, 869d, 879a.

第九節　先験的能力と教育

プラトンの教育論においては初等教育として体育と音楽があり、体育によって健全なる国民の身体の成長を促進し、音楽によって国民の精神を調和し、その韻律によって国民を規律する。中等教育として算術があり、すべての学術の基礎的な訓練としてまた日常生活の必須の知識として何人も学ばなければならないものである。算術につづいて幾何学を学ぶのである。幾何学は高級なる基礎的な学科であって、人の心をイデアの方にひきよせ哲学的精神を養ない、思惟の力を修練する。(1) 有能なる国家の公務員たらんとする者は必ず幾何学を修めねばならない。幾何学を修めたものと修めないものと比較するとき、いずれの方面においても知識の理解の面において無限の差異が生ずる。(2) それ故に幾何学

は算術についで第二の必須科目と定めねばならない。更に高等教育として、天文学（ἀστρονομία）をもって第三の学習科目とする。歳月、季節の循環、気候の変化等は日常生活において、また農耕・漁業・舩人にとって必要欠くべからざるものであるが、天文学は人の心を向上せしめ、地上の世界より天空の世界に導くものである。[3] 天文学によって可視の知識より不可視の（ἀόρατος）知識への道を拓き、魂を天上に向わしめる。仰視するところの日月星辰燦爛たる天空は可視の面もあるが、その軌道、運行の速度、距離、形状、その数等は視覚の対象ではなく、知性（διάνοια）によってのみ解明されるものである。[4] 天文学においては眼に関するものと耳に関するものとがある。眼は星辰を見るために存し、耳は調和の運動を聴くようにつくられているのである。[5]

いかなる知識もそれに達せねばならないところの極致なるものがある。それゆえに決して不完全に終るべきものではない。すべてのことがらは魂のうちに存する至高の知性を高めて、実在のうち最上なるものの認識に導くことは、可視界より更に不可視界の最も光輝あるものを見るに至らしめることである。[6]

しかし苟くも学術を学ばんとする者はその前提となれる仮説を検討することなく、仮説に理由（λόγος）を与えることがない限り、決して明確なる実在を見ることができない。すべて学術において出発点であるところの第一原理（ἀρχή）を明らかにせずして、その結論のみを知ることをもって満足するならば、かかる知識は学知（ἐπιστήμη）ということができない。[7] 第一原理に遡って学問を攷究するのが論理学（λογιστική）である。[8]

論理学は直進して第一原理に至り、仮説を除去する（ἀνυπόθετος）ところの唯一の学科である。論理学は悟性（δίανοια）の働らきによって明晰な（λαμπρός）なる知識に導びくところのものである。かくのごとく論理学は知識を究極のところまで高めてゆく学問である。かくて算術や幾何学は勿論、天文学でも論理学の準備であるということができる。

あらゆる学問のうち最も高度なるものは弁証法（διαλεκτική）である。弁証法は統治者の修得する学として、国家最高の試験に合格した者に課せられたものである。[9] 弁証法はイデアの直観（ἐπίπνοια）であって、哲学者たり得る人のみに課される高度な学問である。

人は幼いときから正しいこと、善きこと、美わしいことを学び、それを尊重し、それに従うように育成されてきているのであるが、それらの事がらについて質問されたときに、その答に反駁されて今迄正と考えていたことが正でなくなり、美と考えていたことが美でなくなるように思う危険がある。かくのごときことにならないだけの確信のある真知を取得するための学が弁証法である。

プラトンはその師ソクラテスと同様に知識の探究者であるとともに知識の愛求者（φιλόσοφος）であった。訓練された弁証家（διαλεκτικός）であり、イデアと人々とを媒介する徳の教師であった。[10] 教育（παιδεία）とは教師がイデアに向って子弟を導くことである。[11] 教育は助ける働らきであり、学習（μανθάνειν）は作り出す働らきである。自分自身のうちに生れつき（φύσει）備わっている能力がなければ感応することができない。真知（ἐπιστήμη）は長い間の教育と努力によって備わるものである。[12]

ポリスのすべての国家活動は国民の教育であった。ポリスは一つの国民教育の場であり、国家のすべての機関は市民の徳性の涵養という目標に向って活動している。教育によって人間性（φιλανθρωπία）が発露され開発される。それ故、国家は教育によって人間性を（φιλανθρωπία）が発露し開発する。国家は教育によって人間性を開発する組織である。国家そのものが人間教育の場である。[13] これについてナトルプも人文主義による教育的世界観を指導原理とする国家はプラトンの理想国家である。理想国家は教育国家（Erziehungsstaat）であるとのべている。[14] 一般に国家は国民の人格を陶冶訓練するために存するものであって、国家のうちにおいて国民は教育されて、各自の能力を発揮し、徳を身につけることができるのである。[15]

この思想はヘーゲルの教説のうちに見ることができる。すべての文化的なるものは、国家のうちにおいて教育によって受継がれ、国民は国家のうちにおいて客観的精神によって教育され人格が育成される。国家の機能は国民に教育理念を実現することである。また国民は自発的に徳を身につけるように教育されねばならない。[16]

すべて高度な学問は論理的方法をもって行われねばならない。公理から出発して、論理的に推論してゆく方法、即ち幾何学的証明の方法をもって哲学的探

究の方法とするものである。[17] (ἐξ ὑποθέσεως σκοπεῖσθαι…ὥσπερ οἱ γεωμετρίαι) すべて真理というものは日常的な経験に従って考えられてはならないものである。真理は論理的・普遍的に妥当するものでなければならない。[18] この推理の理論は、人間の魂に存するアプリオリな先験的能力の存在を立証するものである。普遍妥当的客観的なアプリオリな能力の承認によって一切の真理（ἀλήθεια）は基礎づけられるのである。[19] アプリオリな能力の存在は帰納的な（ἐπαγωγή）教育の方法によって立証することができる。[20]

しかしアプリオリな知識（ἐπιστήμη）に類似するものに正しい臆見（ὀρθὴ δόξα）がある。(ὅτι δε ἐστίν τι ἀλλοῖον ὀρθὴ δόξα και ἐπιστήμη) 正しい臆見と科学的知識との差異は真知に特有なるアプリオリなロゴス的根拠の有無によって区別される。[21] ロゴス的根拠は巧妙なる教育手段である問答法（διαλεκτική）によって若者の魂のうちに目覚まされるのである。問答法によって若者の魂のうちに存する不滅のもの、アプリオリな能力の存在することを確認することができる。[22] メノンにおいて目覚まされた論理的な関心は更に強くユウティデモスのうちにのべられ、弁証法的教育法により、学問の究極の目標は個々の特殊的知識より最高のロゴス的知識にまで遡源してゆくことである。[23]

(1) Platon, Politeia, 525c, 526c.

(2) Ibid, 531d.

(3) Ibid, 528e, 529c.

(4) Ibid, 529d.

(5) Ibid, 527e.

(6) Ibid, 530c.

(7) Ibid, 511a, 533d.

(8) Ibid, 546a.

(9) Grote, Plato and other companions of Socrates, III, p. 239.

(10) Platon, Politeia, 534b.

(11) Ditto, Nomoi, 659d.

(12) Ditto, Theaetetus, 186c.

(13) Bosanquet, Philosophical theory of the state, p. 24.

(14) Natorp, Sozialpädagosik, s. 33～34.

(15) Platon, Politeia, 368c～369a, 406c.

(16) Bradley, Political Thought, pp. 62～63.

(17) Platon, Menon, 86e.

(18) Ibid, 73e, 89a.

(19) Ibid, 81d.

(20) Ibid, 82b.

(21) Ibid, 86a.

(22) Ibid, 81a, 86b.

(23) Ditto, Euthydemus, 290c.